
ネギま！ 龍騎士が往く

キング・ブラッドレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 龍騎士が往く

【Nコード】

N0106X

【作者名】

キング・ブラッドレイ

【あらすじ】

その身に賢者の石を宿し、ドラクエの呪文をひっさげて、黒龍を伴って往くのは、ネギまの世界！

プロローグ（改訂済）（前書き）

プロローグです

10月28日加筆修正しました。

話の大まかな流れは変わりません。

プロローグ（改訂済）

「うっ……クッ……」

飛んでいた意識が回復すると、俺の視界に飛び込んで来たのは、辺り一面の火の海と飛行機の残骸だった。

「そっだ……。俺、は……。」

頭を何処かに打ち付けたのかクラクラとする頭で思考する。

俺は現在高校三年生で受験も無事に終わり、卒業旅行に1人でイギリスに行こうとして、その飛行機が落下したのだった。

3

「ここから……。出ないと……グウッ！」

腹這いの状態から起き上がろうとしたら胴体に鋭い痛みを感じた。何事かと自分の身体を確認すると、

「お、いおい、マジか……。」

何処の部品かはわからないが、一本の鉄鋼が腹を貫いていた。

「あー…………詰ん、だな。」

動かなければ、腹の痛みは差程では無いが、じわじわと血が滲み出て意識が薄れていくのがわかった。

「くそっ…………！一か、八かで…………。」

パンツ

俺はそう言って、あるマンガで見た様に精神が自分の身体に潜る様に意識をしながら自分の両手を合わせ、祈って居るような型を作って、鉄鋼に触る。

勿論、鉄鋼に変化は無い。

「は、はっ…………だよ、な…………。」

俺の意識があつたのはそこまでだった。

「おろっ？」

気が付いたら俺は真っ白な空間にいた。
上も下も、右も左も真っ白。

「俺は飛行機で……って言うか、ここは……」。

見覚えがある。

だけど、“現実の世界”じゃない。そう、マンガの世界の……。
そう考えていると、突然背後から声をかけられた。

5

『よお。』

「……」

やっぱりそうなのか……？

そこには人の形をした光が地面(?)にあぐらをかいて座っていた。
た。

そして、人型の背後には逆さまの木
セフィロトの樹が彫
り込んである扉が浮いている。

……嫌な予感しかしねえ。

「……………誰だ？あんだ？」

一応聞いてみるか。

『おお！よくぞ訊いてくれました！』

やっぱり予想通りというか、人型はその質問に嬉しそうに反応する。

そして、ゆっくりと謳うように言葉を紡ぐ。

『オレはお前達が“世界”と呼ぶ存在

あるいは“宇宙”

あるいは
“神”

あるいは
“真理”

あるいは
“全”

あるいは
“一”

そして

オレは“おまえ”だ』

“真理”はゆっくりと俺を指しながら言い放った。

『 ようこそ

錬金術師でも無いのに“扉”を開いたバカ野郎。』

……………ん？コイツとんでもない事言わなかったか？

「扉”を開いた？」

『 ああ。お前はその人生の最後の瞬間、偶然にも扉を開いてここに
来た。』

人は生まれながらにして、扉持っている。

それがはつきりと知覚できるのは赤ん坊だけだ。
しかし確かに持つていて、その扉を開き、扉の向こうから錬金に必要なエネルギーを汲み上げて行使するのが、錬金術師なんだが……
…。」

「俺が偶然開いて此処に来たと？」

『そういう事だ。お前は本来、錬金の為のエネルギーになる筈だったんだがな。』

真理はそう言って愉快そうに笑った。

マジか……。余り、扉を開いた自覚は無いんだがな。

『突然だが、お前には“ネギま！”の世界へ行つて貰う。』

「はぁ!?!」

いやいやいやいや!

それってマンガの世界だよな!?

名前は聞いたことあるが、内容全然知らんし!

普通、真理君(?)が居るんだからハガレンじゃないの!?

『時間が無いから、もういくぞ。』

え？

「ねえ、持ち物は！？装備は！？ちよつとちよつと！！」

ギイイイイイイ……………

テンパってる間に扉開いてるし！！

いやああああ！！

ワサワサした黒い手がいっぱい！！

『 武運を祈るぜ。』

祈るって誰に！？

お前より上位存在居るの！？

そう叫ぼうとしたところで意識が暗転した。

プロローグ（改訂済）（後書き）

こんな感じで話が進んでいきます。

真理と扉については、原作とアニメ一期を参考にした完全な独自解釈です。

感想や意見等あったら気軽にお願いしますm（|）（m

第一話（改訂済）（前書き）

一話です

プロローグと同じく、加筆修正しました

流れは変わりません

第一話（改訂済）

目が覚めるとそこは、夜の森の中開けている場所だった。側で焚き火が燃えている。

とりあえず起き上がるが、クラクラする……………。
なんか背が低くなってるし。

「ああ、クソ……………。あの真理の野郎……………今度会ったらぶつ飛ばす……………」

いきなり訳のわからん場所に飛ばすとか理不尽過ぎるぜ……………クソッタレ。

まあとりあえず、状況確認だ。

今は夜で、周りに動物の気配は無い、側に在るのは革製の袋のみ。どうしたものか……………。

「そういえば、何故に旅人の服？」

何故か服装がドラクエ装備だし。

いや、ドラクエ好きだったからいいけどさ。動きやすいし。

「それじゃあ、この袋は……………？」

まさかと思い、おもむろに中に手を入れて中を探ってみると、やっぱり出てきたのはお馴染みの薬草だった。しかも、出るわ出るわ数えてみたら99口……………。

「中の構造どうなってんだ？毎回思うが、絶対普通じゃ入りきらないよな……………」

ぶつくさ呟きながら、中ものを全部出してみたら、

- ・薬草×99
- ・キメラの翼×（恐らく）
- ・眼帯×5（？）
- ・食料（沢山）
- ・銅の剣×5
- ・鋼の剣×3
- ・鋼の鎧×1
- ・鋼の小手×1
- ・鋼の盾×1

こんな感じ。

剣が沢山あるの？とか何故に眼帯？とか、この森安全なのか？とか色々気になるがとりあえず、寝る。

「実質的には、俺って死んだんだよな……………」

寝転がり、元の世界と見た目は変わらぬ空を眺めながら考える。卒業旅行を発端とし、あれよあれよと異世界に来てしまった俺。自分でも未だに確かな実感が湧かない。

「ここはある意味俺にとっての天国か、はたまた地獄か……………」。

遺していった両親や友達も気になるが、元気に暮らしているだろう。

「全は一、一は全……………」か。」

誰かが死んでも、世界は、人は何事もなく生きて、肉体は他の生物が生きる糧となる。　　だっただけか。

「……………まあ、いいや。寝るか。」

「ろりと寝返りをうつと、目をつぶって睡魔に身を任せる。

「明日は水場の確保からだな……………」。
こうして、色々な不安の中、俺の異世界（ネギま！）ライフが始まった？

朝です。

おはよございます、俺です。

朝起きて、昨日のうちに水場を探しとおけばよかったと後悔しました。

……………顔が洗えません。

仕方無いので眠気が覚めるまでごろごろしてから、小ぶりで取り回しのいい銅の剣を持って袋を腰に着けて探しに行きます。

んで、銅の剣で道を切り開きながら歩いて5分程の場所に水質の良さげな川を発見。

水場を確保！ってテンション上がり過ぎて、そのまま服を脱いで水浴びをする。ここで、気付いた事が幾つかある。水を鏡代わりにして見たんだが顔は黒髪は相変わらずで、左目は紅色になっていた。

んで、右目が……………キング・ブラッドレイと一緒にウロボロスの印が出ている最強の眼です。

ああ、その為の眼帯か。

歩いて来るとき、何故か風の流が見えている気がしたのはコイツの所為っばい。

「ん？そしたら、身体は……………」

まさかと思い、恐る恐る銅の剣で指の先をちょっと斬ってみる。
錬成反応が出て元通り。

「あちゃー。人造人間か……………」

不死じゃ無いだろうけど、不老なのか？

今の肉体年齢13歳程度なのだが……………。このままとか、冗談じゃないぞ。

水浴びを終えてとりあえず、焚き火の場所に戻り今後の方針を考える。

色々考えて、暫くはここを拠点として剣の鍛練をことにした。
森の外の様子も気になるが、今ノコノコ出てって魔物とかいたら
人造人間だからと言ってもつらいだろう。

幸いにも、元の世界ではちよいと剣術を齧っていたので、丁度いい。てか、この身長で鋼の剣を振り回すのってシユールだな！

そついう訳で、寝る時と食事の時以外は鍛練をする生活が始まった。

そんなこんなで、1ヶ月程経ったと思う。カレンダーなんざ無いし、毎日やる事は一緒なので日にちの感覚は無くなった。最初は以前（生前？）使っていた木刀の片刃と鋼の剣の両刃の勝手の違いに悩まされたが、使いこなせる様になった。

しかもこの肉体のスペックが素晴らしく、重い筈の鋼の剣が片手で軽々と取り回せる。

ウロボロスの目は風の向きや動きなどが見えるが、脳への負担が多少あるらしく、最初は数分間意識して使うだけでも頭痛がしたがもう慣れた。

まあ、不気味過ぎるから人前では眼帯をするけどね。

それと、薬草を増やすために薬草にこびり付いている種で栽培（？）なんかも試してみた。

こつちもこつちで凄まじく。適当に耕して、埋めると二週間程で1メートル程の薬草の葉がなる木になった。雑草より強靱だぞ、これ。薬草の葉を採っていくと偶に上薬草も見つかった。恐らく、上薬草は薬草より十分な養分を吸収したら出来るのだろうと思う。

そして、気になる点が一つ。行動範囲を広げようと川へ向かうのとは逆方向を散策していたら、何かを通ったかのように木々が薙ぎ倒されていて、地面には大きな人間らしきモノの足跡が付いている所が幾つかあった。

足跡は全て一方向へ向いていて、辿つていくと終着点には巨大な洞窟があった。……………嫌な予感しかしねえ。

とりあえず、洞窟の怪物は無視して鍛練を続ける事にした。

そして、ある日恐れていた事が現実になった。

「おいおい……………マジか。」

「……………!!」

水浴びの帰り、遂に怪物と鉢合わせしてしまった。
怪物は一角に大きな一つの眼に青い肌の巨人……………。

「ギガンテスじゃん。」

棍棒は持つてなかつたりと、所々違うがな。だが、筋肉ムキムキのマッチョな点は一緒。

とりあえず、

「三十六計逃げるに如かず!!」

「……………」

一旦戦術的撤退をする。

ここで戦うのはベースキャンプ（仮）が近くにあるので、不味い。何より、防具も剣も何も装備してない。

キャンプと逆方向に全力で逃げつつ、籠手を着けて鋼の剣と鋼の盾を持つ。鎧は悲しい事に、身体にまだ大き過ぎて合わない。ギガンテスモドキの歩く速さは遅い様なので、助かった。

「さあて……………行きますか!!」

俺は頬を叩き気合いを入れて、ギガンテスモドキに向かって疾走した。

第一話（改訂済）（後書き）

感想や意見等あったら気軽にお願いします

第二話（前書き）

一話です

いきなりの戦闘回

第二話

side
□ト

「クソッ！！コイツ強え！！！」

「！！！」

ギガンテスモドキに挑んだがいいが、如何せん手強い。
素早さはそこまで早く無いが、力が恐ろしく強い。しかも、タフで斬っても怯みもしないで腕を振り回すから質が悪い。

まだ一度も攻撃を食らってないが、当たったら只では済まないだろう。最悪ミンチだ。

“死に難い” 身体だが構造は一緒の為、痛いものは痛い。

「ちいつ！！効いてない様だな！！！」

「ッ！！！」

足を斬り続けてみるが、効果があるようには見えない。
ギガンテスモドキが両手を合わせてオルテガハンマーの様に振り下ろす。俺はギリギリのラインを見切って躲し、そのまま腕を駆け上がる。

「オラァ!!!」

ザシユ!!

「ツ!!!」

そのまま剣を振り回しながらギガンテスモドキの身体を一気に駆け上がる。

肩に到達した所で目に剣を突き刺そうと跳躍したが

「なっ!?!」

「!!!」

ドロンッ!!!

クソッ……振り回しているだけの腕にクリーンヒットは笑えない
ぜ…………

頭から地面に叩きつけられた。。これで一回死亡。肉体がポロポ
ロだ。直ぐに再構築されるから問題ないが

「あーあまずい、脳震盪だ。」

脳が揺らされて、周りの景色がぐにゃぐにゃになってる…………こ
りゃ、ヤバイ。

「…………！」

ギガンテスモードキが目潰しから復活したようだ。

こつちもある程度治ったが踏み潰されたら再生に時間が掛かるし、
その間にメツタメタでENDだな

なら選択肢は一つ。

「躲す。」

感覚を研ぎ澄ます

突破口を決じ開ける

駆ける

「先手必勝!!」

疾風の如く

「疾風突き!!!」

ズブシュ!!!

「ツツ!?!」

「うおっ!?!」

ギガンテスモドキの攻撃を躲して突きさした鋼の剣は深々と腹に刺さったが、ギガンテスモドキは大きく暴れ始めて振り落とされた。

これでも効かないのか!?

とりあえず、今のうちにもう一本鋼の剣を袋から取り出して様子を伺う。

もうカウンターはゴメンだ。

「……………」

落ち着いた(?)ギガンテスモドキは腹から剣を抜いて握り潰した。絶対掴まりたくないな…………。

そして、くるりと振り返ってどこかへ歩いていく。俺を放って巢に帰るみたいだ。

俺もこれ以上戦いたくないから追わないがな。とりあえず、

「疲れた……………」

粗方治った肉体の再構築を中断してその場に寝転がる。傷が残っているところは薬草を貼ろう。

今日はギリギリ引き分けだったが、余裕で勝てるぐらいにしなきゃ

やな。明日から、また鍛練だ。

「収穫もあつたしな。」

きっかけは偶然だけど、疾風突きが使えるようになった。疾風突きが存在するなら、他の剣技も有るだろう。

これで技を覚える楽しみも出来るし、一石二鳥だ！

ギガンテス（モドキと付けるのが面倒になった。）との初戦から約半年経った。鍛練とギガンテスとの実戦の繰り返しで遂に……

「完全勝利！！」

一撃も食らわずに倒せた！！

あれから使える様になった剣技は隼斬りだけだが。王者の眼にも完全に慣れた

てか、この眼は魔力とかも見えるんだな。

とりあえず、ギガンテスは倒した（気絶してるだけで死んでない。恐ろしい程頑丈だよコイツ……。）ので気絶している間に、ギガンテスの住みかの洞窟の中に入ってみる。

中には大きな骨があちこちに転がっていて、獣の匂いがする。焚き火の跡とかもあった。正直、あの脳筋に火を燃やす技術がある事にびっくりだな。更に奥に進むと一番奥に台座が在って其処には一振りの剣が刺さっていた。

「これは……隼の剣！」

隼の剣は簡単に台座から引き抜けて、柄の部分が吸い付くようにフィットして、本当に羽の様に軽かった。

ギガンテスからはいい剣を（勝手に）譲り受けれたな。

それで、俺はこの森を出て外へ行ってみようと思う。

自分で言うのもどうかと思うが、ギガンテスと鍛えて実力も着いたし賞金稼ぎ《バウンティハンター》でも、始めてみる。

その為に必要なのは……………

「名前、だな。」

多分、和名じゃ訝しがられるだろうし生まれ変わったみたいなものだしな。

名前はキング・ブラッドレイでもいいけどここはドラクエから取って、

「 ロトにしよう。」

ロト・ドラゴニクスだ。」

ロトは言わずもがな。ドラゴニクスはドラゴンクエストをちょっと文字ってみた。

「……………もうここでやる事はないな。」

ギガンテスも倒したし、薬草の木からは、また生えるだけの量を残して、葉を取れるだけ取った。

「いくか……………」

俺はそう呟くとギガントスの森を跡にした。

もしかしたら、俺　　ロト・ドラゴニクスの人生はここから始
まったのかもしれない。

第三話（前書き）

三話です

賞金稼ごよつての話

第三話

S i d e □ T

ギガントスの森を出た俺はヘラス帝国なる場所に着いた。ここを賞金稼ぎの拠点にしようと思う。

賞金稼ぎにはギルドが有るようだが、とりあえずフリーランスでやっけて行くことにする。

どこかのギルドに入ってもいいが、賞金稼ぎを専門職にして食って行こうとは思ってないので、止めておく。

「おい坊主！ここはガキの来るところじゃねえぞ！」

近くにあったギルドに入り、フリーランス向けの提示板を眺めていると何処かのゴロツキにしか見えないオッサンが絡んで来た。まだ昼間だったのに酒飲んでるし。

まあ、賞金稼ぎのギルドに子供が入ってきたら疑問に思うか。

「何か問題か？」

「っ！ー！い、いや……何でもねえ。」

少し殺気を込めて威圧したら、大人しく引き下がった。何か周りの大人も感心した様子にこっちを見ている。

「とりあえず、手堅いとこ」……………」。

30万ドラクマの賞金首の依頼の紙を取ろうとした隣に物凄く気になる依頼があつて、固まってしまった。

・キユクロープスの討伐

場所：タルタロスの森

報酬：200万ドラクマ

「……………」。

キユクロープスって絶対あのギガンテスの事だよな……。あれってかなりランク上だったんだ。

「これで頼む。」

「はい。30万ドラクマのアブドミナル・ゼーレーヴェね。頑張つてね、坊や。」

「ああ。」

まあ、依頼を変える積もりは無いがな。

巨人と普通の人間サイズじゃ勝手が違うし。同じ200万ドラクマの人間を相手にして絶対に勝てる自信は無い。

何はともあれ、

「いくか……………」

「アブドミナルと後は、判るな？」

「はっ！…ガキにやられる程落ちぶれちゃいねえぜっ！…！」

ゼーレーヴェはそう言い放つと懐から杖を取り出した。

「魔法という奴か……………」

後は、判るな？」

「はっ！…ガキにやられる程落ちぶれちゃいねえぜっ！…！」

ゼーレーヴェはそう言い放つと懐から杖を取り出した。

「魔法という奴か……………」

俺は、背中に刺してある隼の剣を鞘から抜いて疾走する。距離は15メートルぐらいか。

「集い来たりて敵を撃て！連弾・炎の26矢！」

ゼーレーヴェは炎の矢を放って来るが、

「……………遅い。」

「んなあ！？」

俺は持ち前の動体視力で全ての矢を見切り、光弾の間をすり抜けるようにして躲す。

身体が小柄な事もあり、躲すことは容易だ。

「クソッ！」

集い来たり「

疾風突き！」ぐえ！」

「安心しろ。峰打ちだ。」

「フリーランスは辛いよってか……………」

ゼーレーヴェをしょっぴいてギルドに戻ったが、貰えた報酬は1
8万ドラクマだった。

仲介手数料やら何やらでフリーランスの賞金稼ぎはギルドに4割
渡すんだと。

「やっぱりどっかのギルド入ろっかな……………」

正式にギルドに入れば、報酬丸々貰える様になるらしい。子供の
を雇うギルドが有るかどうかが疑問だが。

それはさておき、

「魔法を使ってみよう！」

なけなしの金で初心者向けの魔法の本と練習用の杖を買って、タ
ルタロスの森に来ています。王者の眼で確認したところ、俺は
魔力はかなりの量を保有しているみたいなので魔法が使える筈！

「えっと、一番簡単な魔法は……………プラクテ・ビギナル 火よ灯れ
！」

……………火は出ません。

「プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

.....。

「プラクテ・ビギナル 火よ灯れ（ry）」

「プラクテ・ビギナル 火よ（ry）」

（2時間後）

「ぷ、プラクテ・ビギナル 火よ灯れ！」

（四時間後）

「グスツ……プラクテ・ビギナル 火よ灯れえ!!!」

灯れと言うか、灯ってください!

結局、この日一回も灯りませんでした。orz

一週間経ったけど、根気良くやっています。未だに火は灯ってないです。んで、少しやり方を変えてみる。

今までは詠唱中に魔力を込める感じでやっていただけ、詠唱の前に魔力を込めてみる。

「（目をつぶって、魔力を引き出す……。）」

充分だと感じたところで、目を開けてみると。

「……………何コレ。」

魔法は発動した様子。だけど、金色に輝く古代文字のようなのが俺の周りを漂っている。んで、唐突に出てきた呪文の発動キ！。

「 《メラ》 」

ドゴンッ！！！

「うおっ！？」

唱えた瞬間、火の玉が飛び出て地面に着弾すると人の大きさ程の火柱になった。

「ドラクエの呪文は使えて、この世界の魔法が使えないってトコか？これは？」

その後も色々調べてみたが、やっぱり魔法は使えなかった。呪文は全属性の呪文が使えるには使えたが、色々と差異があった。とりあえず、収穫があったので意気揚々と一週間振りに街に戻るうとキメラの翼を使おうとした所に。

ガサツ

「ん？」

「キュエー……………」

バタツ

「お、おい！」

物音がして音の方向を見ると、そこに居たのはケガをしてキズだらけの竜の雛だった。

「えっと、とりあえず……………《ホイミ》」

ホイミで傷を癒すが、まだ未熟で適正も無い為、余り回復しない。しょうがないので、薬草を傷の部分に貼りつけて袋から食料の干し肉を取り出し、口先に近付ける。

「ギ……………キュエー……………」

「いいから食べ。」

威嚇するような仕草をしたが、それに構わず干し肉を押しつける
と、観念したのか食べはじめた。それと、川から水を汲んできて
飲ませる。これで大丈夫だろ。

「あとは、自分で生きる。」

ギガンテスもここには近寄らないだろうしな。

俺は竜の雛が眠っているのを確認したキメラの翼を放り投げて街
に戻った。

今、俺は賞金首を追って街の外を外を歩いている。

竜の雛を助けてから2日経った。調べてみたら、あの竜は黒龍と
いう龍の雛らしい。

黒龍は龍種の中でも上位に位置する存在だと言つ。
親に見つかっていたらどうなった事やら……………。

「キュエー!!」

そんな事を考えていたら、空から何か降りてきた。
と、いつか……………

「お前!この前の雛か!?!」

「キュイ!!」

—昨日助けた竜だった。礼でもいいに来たのか?

「あー礼はいいから。頑張つて生きろよ。」

俺はそれだけ、言ってさっさと歩き出すがクロスケ(仮)は後ろ
を着いてくる。

「なんだ?まだ何か有るのか?」

「キュエー!!」

クロスケ（仮）はまた一鳴きするだけ。ん？もしかして、

「お前、一緒に着いてきたいのか？」

「キュイ！キュイ！」

クロスケ（仮）は首を振って反応する。お前言葉解ってんのか？

「はあ……………じゃあ行くぞ。」

「ギューー！」

このまま押し問答しても無駄だろうし、黒龍なら戦力になるだろう。

クロスケ（仮）は嬉しそうに鳴いて後ろを着いてくる。

奇妙な道連れが出来たもんだな……………。

余談だが、賞金首をしょっぴいてギルドに戻ったら後ろを着いてくる黒龍の雛を見て物凄くびっくりされた。

第三話（後書き）

こんな感じでした

次回は設定を載っけます

第四話（前書き）

賞金稼ぎと言うなのであの人とは戦う事になる訳で……

誤字修正しました

第四話

side
ロト

こつちの世界に来てから、何十年か経った。

結局、賞金稼ぎとしてひたすら賞金首を捕まえてきた俺には、いつの間にか、二つ名が付けられていてかなり有名になっていた。

その名も“隻眼の竜騎士”

他にも“呪文使い”《スペルマスター》やら“ドラゴンライダー”なんてのもある。厨臭え…………。

竜騎士ってのは、黒龍のドランを連れているからだろうな。

それと、あの黒龍は名前はドランにした。

ドランも立派に成長して、まだ成体では無いだろうが、かなり大きくなった。

俺を乗せるには十分な大きさなので目的地に行くときには重宝している。

それで、今俺はアフリカに居る。ドランは流石に連れてこれなかった。

対峙するのは妙齢の女性と人形。女に手を上げるのは趣味じゃないんだが……この依頼、受けなきゃよかった。

「“闇の福音”エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだな？」

「そうだが、貴様は何者だ？」

「賞金稼ぎ《バウンティハンター》ロト・ドラゴニクス。」

「！！ ほう！ “隻眼の竜騎士”がこんなガキとは思ってなかったぞ！」

「ほつとけ。実力と年齢は関係無いだろ？」

実際は50年以上生きてるしな。
因みに、外見年齢は16歳ぐらいだ。

「フツ、違くない。では、行くぞチャチャゼロ！」

「アイサー、御主人。」

その一声で戦いの火蓋が切られ、人形が武器を持って斬り掛かってくる。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァンジェリンは前衛を人形に任せて魔法の詠唱を始める。俺も人形を相手にしながら、マルチタスクで魔力を貯めて呪文の発動準備に入る。

「魔法の射手・闇の34矢!!!」

「《ドルクマ》!」

人形の相手をしながら、魔法の矢を闇の呪文で相殺。

「魔法の射手 連弾 闇の299矢!!!」

人形が離脱し、間髪入れずに生じた魔法の矢が殺到する。

俺は避ける事はせず、前傾姿勢を取りながらエヴァンジェリンに向け疾走し、魔法の矢は確実に当たるのだけを王者の眼で見切って隼の剣で落として行く。

「なにっ!?」「惚けてていいのか?」「クッ!!!」

俺の行動にエヴァンジェリンは驚いた表情をする。俺が接近し斬り掛かるうとしていているのを見て、慌てて空へ飛んで回避しようとするが、甘い。

「飛ばやしないが、跳べるんだぜ？」

「!？」

純粹な身体能力だけで跳び上がり、メラ系統の力を載せた隼の剣で斬り掛かる。

「 火炎斬り!! 」

「 氷盾!! 」

不意を突いた積もりだったが、相手は何百年も生きた吸血鬼。障壁を出して防ぐ。

「相殺されたか!」「オレヲ忘レテソジャネエゾ!」「チイツ!!」

地面に着地した隙を狙って人形が斬り掛かってくる。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァンジェリンが詠唱を始めとそれに伴い、掌には高密度の魔力が収束していく。上位魔法か！

「契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえのやみ
えいえんのひょうが」

俺もそれに対応するために魔力を掻き集める。
そして

「おわるせかい！！」

「燃やし尽くせ！！《メラゾーマ》」

ぶつかり合った氷の魔法と炎の呪文が大量の水蒸気を生み出し、お互いの姿を隠す。

だが、俺には右目の王者の眼がある。空気の流れを読み、エヴァンジェリンと人形の居る方向に爆発呪文をたたき込む。

「はぜろ。《イオナズン》」

ドゴオオオン！！！！

魔力による大爆発が起こり、大音量が鼓膜を襲う。しかし、間髪置かずにナイフが俺の顔面目がけて飛んできてきた。

ザシユ

「グツ……………」

咄嗟に左腕をかざして防ぐ。煙が晴れると無傷では無いが、重傷があるわけでもないエヴァンジェリンと人形が見えてきた。

s i d e o u t

s i d e エヴァンジェリン

クツ！油断をした訳では無いが、相手の行動が普通の相手とは違うからに遣りにくい。それに…………

「……………その眼はなんだ？魔眼の一種か？」

右目の眼帯の下にあった眼には黒目の替わりにウロボロスの印が刻まれていた。

「ん？　これは言うなら……………“最強の眼”だ。」

そう言って、“隻眼”の龍騎士は不敵に笑う。

「謎かけか？つまらんど。」

「相手に自分の手札を晒すわけないだろ？」

「違ういな。」

ロト・ドラゴニクスは会話をしながら此方を警戒しつつ、左腕のナイフを抜く。

そして、

「な！？」

「馬鹿な！傷口が再生していく！？」

「貴様！！吸血鬼だったのか！？」

「いや。俺は人造人間ホムンクルスの一種でな。」

「はあ！？人造人間ホムンクルスだと！？」

「ありえん！！！！」

それを聞いて、ロト・ドラゴニクスは今度はニヤリと笑った。

side out

side ロト

「ありえん！！！！」

「ほお、そいつ言っちゃおうか。」

「 がない、なんて事は“ありえない”ぜ」

「……………」

いやー言っちゃったよ名ゼリフ。

「 吸血鬼のお前も、魔法使いも実際はお伽噺の様な存在だろ？」

ぬらりひょんとか狼男とか居そうだし。

「さて、お話は終わりだ。続きを……………ん？」

コイツ右目で見ると、ぼやけて見える。

まさか幻術か？いっちょ試して見るか……………。 右手をエヴァン
ジェリンに向けてかざす。その行動を見て身構えるがもう遅い。

「《凍てつく波動》」

「「な!?!」」

波動によって全ての付加効果が解除されて、エヴァンジェリンと俺、双方から驚きの声が漏れる。

「き、貴様！！なんの魔法だ！？何をした！？」

エヴァンジェリンは波動によって幻術が解除された事に驚いている。

「おおーずいぶんテンパってやがる。」

俺は、幻術が解除された本来の姿に驚いた。

「外見ガキかよ……………」

「ますます、やる気でねえ。」

「なっ！！これでも貴様より400年は生きてるわ！」

「遠マワシニ、外見ハガキダツテコト認メテルナ御主人」

「チャチャゼロは黙ってる！！！」

ケケケケケと人形が笑ってそれを幼女が怒鳴ってる。シュールだ。

「あー俺、帰っていいか？」

「なっ！！貴様！！私を狙って来たのじゃなかったのか！！」

「ナンダヨ。モット斬リアオウゼ。」

「いや。俺子供に手を出したくないし。」

「私は大人だ！！！！」

そう言ってる奴に限って子供なんだよ。あーシリアスがぶち壊しだ。壊したの俺だけど。

「興醒めだ。帰る。」

「貴様！！そう易々と帰すと思ってるのか！！」

「ケケケケケ」

エヴァンジェリンが魔法の詠唱に入り、人形が斬りかかろうとするが遅い。

「じゃあな。《レムオル》」

「「!？」」

レムオルは光の当たり具合を調節して自分を透明にする。気配や魔力さえ遮断するからある意味最強の呪文だ。まあ、物音は普通に立つし、透明化したら攻撃は出来ないっていう欠点はあるけどな。とりあえず、魔法世界に帰るか。ドランを迎えに行かなくちゃ。

s i d e o u t

s i d e エヴァンジェリン

「クソッ!!なんだったんだアイツは!!」

捕まえるって言って現れて、自分が人造人間ホムンクルスだとか言ったり、幻術解いたり引っ掻き回すだけ引っ掻き回して帰って……!!!!

「今度会ったら許さん!!!!」

「ケケケケケ　ズイブン楽シソウダナ、御主人。」

全然楽しくない!

s i d e o u t

第四話（後書き）

という事で、エヴァとの戦いでした

感想や意見、アドバイス等頂けたら嬉しいです

第五話（前書き）

大戦期前最後の話になります

では、どうぞ

第五話

Side ロト

今、ドランを迎えに行つて、エヴァンジェリンを捕まえる依頼を受けたギルドに失敗を告げてから今夜泊まる宿を探しているんだが、

「何だかなあ……………」

簡単に言うと、賞金稼ぎが遣りにくくなった。

現在もフリーランスの賞金稼ぎとしてやっているが、“隻眼の龍騎士”など割と有名になったので、あちこちのギルドから勧誘が来ている。別に何処かのギルドに入って問題は無いが、自由に動きたい時に動けなくなるなど俺からするとデメリットも多い。

賞金稼ぎを辞めても数年は生きていける貯蓄はあるが、この年で隠居生活はゴメンだし何よりもせっかく貰った力だから、何かに活かして行きたい。

「うーむ……………」

ここまで考えてふと、妙案が浮かんだ。

「自分でギルドを作ればいいじゃないか。」

なんで気付かなかった……。

で、

思い立ったが吉日と、その日のうちにギルドの創設をヘラス帝国に申請して数日後、回答が有り創設の許可が出た。しかも、ギルドの本拠地建設場所もヘラス帝国首都に作りドランの為のスペースも設けてくれるだと。

ギルドの名前は《アレフガルド》にした。自分の名前も“ロト”にしたので、ね。

あと、ギルドマークはウロボロスと一緒に形だ。

余談だが、“龍の騎士団”とかどうかと、申請しに行った時に申

請書を受け取った人に言われた。

まあ、“賞金稼ぎ”であって“騎士”じゃ無いので却下したがな。俺のファイトスタイル殆ど騎士や剣士と似たようなモンなんだけどね。隼の剣の見た目がそんな感じだし。

閑話休題

それで、申請自体は許可されたんだが何故か皇帝陛下に召集されて謁見する事になった。

なんかしたつけ……………

コンコン

「準備が出来ました。陛下がお待ちです。」

城へ行くと、待ち合い室の様な場所に通された。暫く待っていると準備が出来た様で、ノックをして衛兵が声を掛けてくれた。

恐らく皇帝直属だろう。立ち振る舞いに気品が感じられ、実力も確かなようだ。

「此方に。」

「失礼します。」

衛兵に扉を開けてもらい中に入る。

そして、扉の向こうに居たのは、式典等で何度か見たことの有るヘラス帝国皇帝ご本人だった。

「お初にお目にかかります。私が、今回ギルドの設立を申請させて貰ったロト・ドラゴニクスです。」

礼儀作法はまいちわからないが、跪いて口上を述べる。

「うむ。楽にして良い。顔を上げよ。」

「はっ。」

「うお……………！言葉一つ一つに威厳を感じるな。」

「噂は聞いておる、ロト・ドラゴニクス。賞金稼ぎとして黒龍を従えておるそうじゃないか。あっぱれじゃな。」

「勿体なき御言葉です。」

そう言ってホッホッホッと朗らかに笑うが、次の瞬間には顔を引き締めた。どうやら本題のようだな。

「それで、本題なんじゃが、ちよいと帝国の為に働いてくれんかの？」

「は？」

思わずそんな声が出てしまった。

「いやいや。今すぐには言わんよ。ここ最近連合との関係が悪くなってきたの……………」

と、最後まで言わず言葉を濁す。成る程。この人意外とタヌキだ。だからあんな好条件でギルドが創設させてくれるのか。貸しがつってコトだな。

「私で良ければ、何時になるか分かりませんがお受けいたしましよ。」

「構わん。助かる。」

話はこれで終わりだった。

さて、次はギルドの人員募集だ。これから忙しくなるぞ……………！

side out

side ヘラス帝国皇帝

「ふう……………」

70

今さつき面会した相手、“隻眼の龍騎士”ロト・ドラゴニクス。依頼の成功率は八割強を誇りる賞金稼ぎで、失敗したケースの賞金首は大抵、理不尽な理由や、濡れ衣の疑いがある者ばかり。恐らく見逃したのであろう。

実際に会ってみて顔を見たが誠実そうな顔立ちの青年だった。人間的にも信頼出来そうなので、帝国の為に頼んでみたが快く承諾してくれた。

「テオドラの護衛でも頼むかの。」

あれはじゃじゃ馬だ。少しでも年齢が近い人を据えたら幾らか大人しくなるだろう。

最近、身の回りの近衛の兵士の入れ替えが度々ある。何か大きな事が近く、起きそうじゃな……………。

s i d e o u t

s i d e ロト

“ 隻眼の龍騎士 ” がギルドを立ち上げると聞いてか、随分多くの人員が集まったみたいだ。

ギルドメンバーの選抜は俺が直々にやっている。他の人に頼んでもいいが、将来仲間になる面子だ。自分でやりたい。

ギルドへの入団試験は皇帝陛下にコロシウムを使って良いと言われたので、そこを借りて何日かに分けて、やっている。

入団試験は費用は無料、試験の内容は俺と戦って“ 納得させる ” だ。中にはミハーハ連中や冷やかして来たようなのも居たが、い腕の奴も集まっている。

チャキ

「ま、参りました。」

「うん、いい戦いだつた。次！」

「次は僕だよ。」

相手の首に隼の剣を当て、降参をしたのを聞いて次を呼ぶと、出てきたのは、赤と白で纏められた様な貴族の様な服を着て羽の刺さったハットを被った金髪の優男。

コイツは……確か“赤き貴公子”って2つ名が付いている奴だ。どっかのギルドに入ってた筈だが……わざわざ抜けたのか？

コイツの登場で周りで見ていた人々もどよめく。

「隻眼の龍騎士を相手に試合が出来て、僕は光栄だよ。」

「御託はいい。さっさと始めるぞ。」

お世辞を聞き流して、隼の剣を構えて促すと、相手も黙って杖を構えた。それでいい。

「初手は譲ろう。掛かってこい。」

「お言葉に甘えさせてもらおうよ　　ルック・ルックス・ルッキン
グ　ものみな　　焼き尽くす　　浄北の炎　　破壊の王にして　　再
生の徴よ　　我が手に宿りて　　敵を喰らえ　　紅き焰!!」

「《バギマ》」

“赤き”と言うだけあって炎の魔法で攻めてくる。てか、始動キ
ーにセンスが感じられねえ……。バギマで相殺して、体勢をなる
べく低くして肉薄すべく疾走する。

「炎の射手　連弾　69の矢!!!」

牽制に矢で段幕。悪くは無いが……。

「甘い。《爆裂斬》」

「なっ!!!」

隼の剣にイオ系の魔力を込めて振ると、爆発を起こして炎の矢

を薙はらう。

慌てて次の魔法を詠唱しようとしているが、もう遅い。純粹な脚力だけで接近して首に剣を当て、終了。

「参ったよ、流石だね君は。」

じゃあ、試験の結果を楽しみにしてるよ。」

そう言い残してさっさと、去っていった。

まあ、強いつちゃそこそこ強いが、アイツは不合格だな。

「次！」

気を取り直して、次を呼ぶ。

「はっ！アラン・サントハイムです！！」

「！！……よろしく」

出てきたのは質素な身なりだが、それなりに体格のいい男。魔法剣士タイプか？

まあ合格、だな。

ここで正直に言ってしまうと、合否の判定は殆ど最初に付けている。

見るのは“目”だ。

こう長年、賞金稼ぎをやっていると、目を見ると本質的な部分がわかってくる。

それで、まだ実力が無くても誠実な奴とかを選抜している。

因みに、さっきの奴は軽薄で自分の身が危うくなると保身に走る様なタイプだな。

「それでは、行くぞ！」

「はっ！」

ひとまず、考えるのを止めてアランと向き合う。

「行きますー！」

アランが一声上げて魔法の詠唱に入る

こうして、“隻眼の龍騎士”ロト・ドラゴニクスを初代マスターとする賞金稼ぎギルド《アレフガルド》が設立。
魔法世界大分裂戦争15年前の出来事だった。

第五話（後書き）

次回は設定を載っけます。

感想や指摘、要望等気軽によろしくお願いしますm（――）m

設定（前書き）

設定です

筆者としてはかなり練りこんだつもりです

設定

名前：ロト・ドラゴニクス

性別：男

種族：ホムンクルス人造人間

容姿：黒い短髪に、切れ長の紅い目。右目は眼帯をしてる。イメージとしてはBLEACHの黒崎一護。

性格：比較的思慮深いが、偶に思い付いた事を直ぐ口に出したり、行動したりする。

賞金稼ぎという職業に誇りを持ち、義理がたい。また、少し口が悪い。面倒見がよかったりする。

Fate風ステータス

- ・筋力：B-
- ・耐久：D
- ・敏捷：A+
- ・魔力：A
- ・幸運：C+

固有スキル：

王者の眼

ウロボロスの印がある右目で、気や魔力、風の流れ等が見える。魔力が見える為、幻術や認識障害の魔法も見破れる。飛んでくる銃弾の回転してる様子がはっきり判るレベルで、モノを“見る”という点では最強。

左目は動体視力がいい只の目

呪文

魔法が使えない代わりに使える。

呪文適正は

メラ デイン>ヒヤド^イオ ギラ>バギ>ドルマ となっ
てい

回復呪文は不得手で、蘇生呪文は使えない。補助呪文は効果は自分自身にしか反映されないものが多い。

フィールド呪文も使える。

備考：

人間をベースにした人造人間ホムンクルスで身体能力は非常に高い。

身体には賢者の石が埋め込まれていて、これにより肉体の再構築が可能。再構築の速度や優勢部位、有無は本人がある程度制御可能。しかし、再構築の最大速度は本来の人造人間より遅い。

また、賢者の石によって加齢も抑えられており、内包する賢者の石を消費し続けると加齢速度が上がっていき、賢者の石を使いきると加齢速度は、極一般的な人間と一緒にになる。また、気は使えない。

魔力量はドラクエ風に表記すると、500前後。因みに、ナギは400程度、木乃香は600強。

名前：ドラゴン

種族：黒龍

ロトに雛の頃に助けられ、以来行動を共にしている龍。

基本的におとなしい性格で、人を背中に乗せる事を嫌悪しないく、専らロトの移動手段になっている。

戦力としても申し分なく、火球を放って攻撃や、翼で大風を巻き起こしての牽制や体当たりなどする。

呪文について

ロトが使う呪文は、魔法とは異なる。

メリット、デメリットとしては、

- ・詠唱が極端に短い。
- ・発動まで呪文の種類がわからない。
- ・魔力消費量が多い。
- ・魔法障壁が存在しない
- ・発動媒体（杖）が必要無い

など。

呪文適正と呪文の関係は適切が低ければ低い程、使用するとき
に効果が弱かったり消費魔力が多くなる。

呪文自体の強さは、勇者特有の呪文であるライデイン・ギガデ
インが最強で次点でイオ系その後はドルマ>ギラ>メラ||ヒヤドバ
ギとなる。

攻撃呪文は

メラ メラミ メラゾーマ

ヒヤド ヒヤダルコ マヒヤド

ギラ ヘギラマ ヘギラゴン

ライデイン ギガデイン

ドルマ ドルクマ ドルマドン

と変化する。

設定（後書き）

仮契約カードは本編で載せます

感想や意見、要望等あったら気軽に寄せください m () m

第六話（前書き）

もう一話投稿

あとがきにアンケートあります

第六話

side ロト

《アレフガルド》を作って、14年。俺はアラン（アラン・サントハイム）にギルドを一時的に預けて、魔法世界をドラゴンと一緒に回った。

ギルドを抜けると表明した時はメンバーからなぜ抜けるのかと、口々に引き留められたが旅をしたいと言ったら“まだ若いんだから世界を見て、色々な人と関わって来い”と暖かく送り出してくれた。嬉しくて涙が出た。

アランはギルドに入ってからメキメキと頭角を表してギルドのメンバーからも慕われていたので、ギルドを渡して安心して旅に出れた。

旅に出た理由としては、皇帝陛下がおっしゃっていた様に最近、帝国と連合との関係が益々悪化してきて、戦争になる前にゆっくと旅行したかったからだ。

それに、アランには二代目ギルドマスターに成ってもらったつもりなので研修みたいな感じでちょうど良い。

そして、ギルドを抜けて1年程経った頃、帝国は連合と戦争になった。

俺は、皇帝陛下から“借り”の内容が戦力として戦地に行ってくれ、という内容だとずっと思っていた。

だけど、陛下からの頼みは「第三皇女の護衛をしてくれ」というものだった。なんで俺に？とも思うが戦争の手助けをしてくれと言われるよりずっと楽なので快よく受諾した。

そういえば第三皇女って式典とかで見たことないな、とか考えながら、謁見の間に通されて暫く待っていて勢いよく扉を開けて遣ってきたのが

「お主が“隻眼の龍騎士”のロト・ドラゴニクスか！？サインが欲しいのじゃー！」

このチンチクリンだった。

「んー…あー……。えっと、お嬢ちゃん？俺は訳あって第三皇女のおオドラ様を待ってるんだ。サインならやるから、後にしてくれないか？」

とりあえず、頭を撫でながらやんわりと注意してみるが……なんかムツとしてる。

「私が第三皇女のテオドラじゃ！」

「おいおい、俺にそんな冗談は通じねえよ。本物の皇女様に失礼だろ？」

「妾が！本物の！テオドラじゃ！！！！」

「そうか。それは凄いな！」

「うーっ！」

何やら涙目になって来たので、扉のところまで佇んでいる衛兵に目で確認すると、苦笑しながら首肯された。

まさか……………！

「……………本物？」

「さっきからそう言って居るじゃろっ！！」

マジか。

「あー……………申し訳ありませんでした。」

とりあえず、跪いて非礼を詫げる。自分よりちっこい奴に敬語って物凄くむず痒くなるな。

「はあ……………もうよい。話し方も普通にしていよい。」

ほっ、助かった。

「まあ、改めて紹介させて貰うが、お前の護衛を頼まれたロト・ドラゴニクスだ。ロトでいい。よろしくなテオドラ皇女様。」

「よろしくなのじゃ。妾はテオでよいぞ！」

そう言って、テオは嬉しそうに笑った。

side out

side other

「んじゃ、非礼の詫びに何か一つ願いを聞いてやる。」

無理な願いは勘弁など、付け加えてロトがテオドラに言う。テオドラは少し思案したあと、ニヤリと笑った。

「ゆっくりと城の外をゆっくりと回りたいのじゃ!」

「おし、わかった。」

「……………へ?」

テオドラとしては冗談半分で言った事だったが、すんなりとOKを貰えるとは思っていなかったなので呆然となった。

皇女の身であるテオドラは稀に城から出られる時は何人もの護衛が付いていて、窮屈で仕方なく店の人々も畏まってしまっとうんざりしていた。

「それだったら、どうするのじゃ?」

「じつするんだよ。」

そう言い放つと、ロトはぶくろから一本の杖を取り出すとテオド

ラに向かって振るった。

「《モシヤス》」

「おお！？おおおお！！！」

ロトが杖をテオドラに向かって振ると、テオドラの姿は扉の所にいる衛兵と声も顔かたちも瓜二つになっていた。

このロトが振った杖は、“モシヤスの杖”と言って通常の場合、唱えた術者にしか効果の無いモシヤスを杖に術式を組み込んだ特別な杖だった。しかも、変化する対象を選べて、アーティファクト以外の変化した人物の能力を継承出来るという、なかなかえげつない代物である。因みに効果がある時間は3時間だ。

「これは凄いのじゃ！！ロト！凄いのじゃ！！！」

「おい、テオ。落ち着けよ。」

何やら興奮しているテオドラにモシヤスの杖の効果の説明する。時間に限りがあると聞いてテオドラは焦り始める。

「時間に制限があるなら急ぐのじゃ！！！」

ロトの手を引き、テオドラは急いで城を出る。今更ながら、テオドラの口調で男が喋ると凄まじく奇妙である。

「ロト!!これは何なのじゃ!?!」

「だから大声だすな。」

あーっとこれはな………っていねえし!!」

「ロト!!早く来るのじゃ!」

色々な物に目移りするようで、テオドラは大声でロトを呼びながら走り回るテオドラ。

しかし、本来のテオドラの姿であれば微笑ましいのだが、今の見

た目は大の男であるから奇怪だ。さらに、何やらクスクス笑われているようである。

本人であるあの衛兵がここを歩くときは苦勞するであらう。

……合掌。

「ロト!!早くするのじゃ!」

「ハイハイ……。」

とりあえず、思考することを放棄してじゃじゃ馬の対応をする事にしたロトだった。

side out

side ロト

「なに?アレフガルドに行きたい?」

「そつじゃ!」

何を言いだすかと思ったら……この皇女様は。

「別にいいが、面白い所じゃねえぞ？」

「いいのじゃ。お主のギルドがどんな所か見てみたいのじゃ！」

「……………じゃあ行くぞ。」

俺が初代マスターであるアレフガルドは、ドラゴンが待機出来る場所の問題もあり、街の外れにある。ギルドメンバーは良い奴ばかりだが、仮にも皇女であるコイツが入ったりしていいのだろうか……。

「ロトさん！？お久しぶりです！」

「ロトだった？」

「おお、一代目じゃねえか……！」

「久々だな！一代目！」

「一代目！！元気だったか？」

「おう、久々だなお前ら。」

アレフガルドに入ると、ロビンを筆頭にメンバーから声を掛けられた。てか、一代目ってヤクザかよ……。そういえば、最近全然顔出してなかったな。

「それで、本当にどうしたんですか？つと………後ろの方は？」

「コイツが俺のギルドが見たいって言うてな。テオ、モシヤスを解除していいぞ。」

「わかったのじゃ。」

テオが本来の姿に戻るとギルドの面々が誰だか判らずに頭をひねる。そういえば、コイツは余り外部に知られてなかったな。

「あゝコイツは第三皇女のテオドラだ。」

「そっじゃー！妾が、ヘラス帝国第三皇女、テオドラじゃー！」

『『『『『な、なんだって〜!?!?』』』』』』

テオドラが薄っぺらい胸を張りながら、言い放つと全員びっくりしてる。

さすがに、これはコイツらもびっくりするか。お、この飲み物貰うぜ。

「一代目が恋人に皇女を連れてきたぞー!!」

「ぶふっ！ー!!」

「『『『『『うおおおおー!!!!』』』』』』」

「こ、恋人かの／＼／」

「しかも、幼女だ！」

「ロリか。」

「ロリだな。」

「一代目の趣味に文句付けんなよ。それより宴だ！」

おい！！なんでそうなる！？不意打ち過ぎて嘖いちまったじゃねえか！俺はロリじゃない！！そして、テオは赤くなってモジモジしてないで何か言え！！

テオとの恋人発言の誤解は解いたが、皇女が来たという事で結局お祭り騒ぎになっている。テオも混じって騒いでいるが、メンバーの誰かが“俺も軍で帝国の手助けをするぜ”と言ったら、顔に陰がさした。お祭り騒ぎで忘れていたが戦争が始まっているのだ。

余談だが、帝国に籍を置いているギルドには連合との戦争への協力申請が来る。もちろん、戦争で死ぬ確率も高いので参加は自由だが、最終後は多額の報酬が約束されている。しかし、ギルドとしては貴重な人材が失われるかもしれないので、従軍を全面的に禁止しているギルドもあれば、受け取る報酬の一部を納めるのを条件に

話を聞き付けて、周りの連中も盛り上がってきた。事情がわからないテオが困惑してるな。

「ロ、ロト？ “稽古”とはなんなのじゃ？」

「見れば判るぜ。」

俺は盛り上がり若干ビビってる様子のテオにニヤリとしながらそう答えた。

この時の笑みは“イイ笑顔”だったと自分でも思う。

「いきますよ！ロトさん！」

「っしやあ！バッチコイ！！」

ギルドにある闘技場で俺とロビンは対峙していた。

俺はいつもの隼の剣を装備し、ロビンはトンファーと魔法具？の指輪を着けている。ぶっちゃけて言うと“稽古”とはウチのギルド特有のイベント(?)で、実質限りなく実戦に近い模擬戦だ。

実戦に近い戦いで経験も積めて、回復役の奴の練習にもなるので頻繁にやっている。我ながら良い案だったと思う。

閑話休題

ルールは簡単。相手に参ったと言わせるか、気絶させるまで続行するシンプルなモノである。

アランもこれで実力を付けたので効果（？）も折り紙付きである。

「今日こそ勝ちます!!」

「やってみろ!!」

開始の合図なんてものは無く、自分達で始める。

アランは声を上げたと同時に駆け出し、俺もそれに習って疾走する。

「そらそらそらア!!!!」

「くっ! 貴方の剣撃は相変わらずッ!!!!」

「うおっ!?!」

「ちっ! ルド・ル・ドルフ・アドルフィ 来たれ雷精 風の精 雷
を纏いて 吹けよ 南洋の嵐」

アランの得物であるトンファーは棒の長い部位で防御をし、短い部位で突く、長い部位で遠心力を使いながら尻ぎ払う等の攻撃を主体とする攻守一体の武器である。

しかし、剣との間合いの違いから必然的にアランは捌く側になる。隙を突いて俺の懐に入り込み棒の長い部位で突を繰り返すが、俺は上体を反らし、そのまま後ろへ爆転しながらマルチタスクを使用して呪文を発動させる。

「雷の暴風!!」

「《ライドイン》!!」

雷と雷が衝突し、爆発を起こす。しかし、アランは感覚で俺の位置を把握し、煙幕を切り裂いて俺に肉薄する。

「腕をつ！上げたなっ!!」

「当たりっ！前ですっ！ロトさんの代理でっ！かなり高額な依頼を！こなしましたから!!」

斬り結びながら、アランと会話をする。本当にコイツは腕を上げた。

ガキンッ！！！！

「ロトさんっ！これでケリを付けましょう！！」

「おうよ！ドンと来い！！！！」

アランの突きと俺の袈裟斬りが真正面からぶつかり、お互いに吹き飛ばす。武器の腕での勝負は付かないと判断したアランが魔法で勝負を持ち掛けてきた。

「契約に従い 我に従え 炎の霸王 来れ 浄化の炎 燃え盛る大剣 ほとばしれよ ソドムを焼きし 火と硫黄 罪ありし者を 死の塵に」

アランが火の最高位呪文を詠唱し、俺は最大焦熱魔法を放とうと魔力を貯める。

アランの魔法適正は雷と火でかなり威力の高い魔法が放てる。雷と火では火の方が適正は高かった。

「燃える天空！！！！」

「《ベギラゴン》！！！！」

炎と焦熱は圧倒的な炎熱を生み出しながらぶつかり合う。
しかし、その均衡は数秒で崩れ去り炎は焦熱に飲み込まれた。

「くっつー！！最大障壁！」

「燃える天空を修得したのは褒めてやるが、まだまだ未熟だな
チエックメイトだ。」

「やはり、燃える天空はまだ未完成ですかね……………参りました。」

アランは炎熱の奔流を障壁で防ぎきつたが、それ以降の行動には
対応出来ずに俺に首を取られてしまった。

アランが降参したことにより、この稽古は俺の勝ちに終わった。

「ロトよ……………」

「ん？テオか。どした？」

再び始まったお祭り騒ぎを隅でちびちび飲みながら、眺めていると何時の間にか抜け出てきたテオが傍にいた。

「ここは……いいギルドじゃな。」

「だろ？自慢のギルドだ。」「このギルドの面々を戦争で死なすのは嫌じゃ。ここの人だけでは無く、街の人々も！」

「……………」

「一刻も早く、戦争を終わらせるぞ。」

「……………ああ。」

テオは決意を固めたようだ。それなら俺が手助けしなくては、な。

s i d e o u t

その夜、城の一室を借りて寝泊まりしているロトの元に一人の客人がいた。

「誰だ？お前。」

「そう殺気立たないで欲しいな。僕は只、勧誘に来ただけだよ、
“ 隻眼の龍騎士” ロト・ドラゴニクス。」

「夜に突然、部屋に入ってくるのは夜這いか襲撃と相場が決まっているだろう。んで、名を名乗れ」

「それは失礼した。僕の名前はフェイト・アーウェルンクスだよ。」

ロトの切り返しに苦笑する様子を見せながら、フェイト・アーウェルンクスは名を名乗った。

「Fate《運命》ねえ……。んで、勧誘の内容は？」

「世界を救って見ないかい？」

F a t e 《運命》の担い手はそう言い放った。

第六話（後書き）

最近なんか戦闘シーンばっかだな……

突然ですが、ヒロインを募集します

ヒロインはテオドラ＋麻帆良勢から4人〜6人程で考えています

一人二票で、ヒロインにしたいというメンバーに入れてください

ユーザーでない方も感想を書けるので、気軽に投票をお願いします
m () m

期限は10月27日の0時までです

よろしくお願いします

第七話（前書き）

沢山の投票ありがとうございましたm（
）m

やはり感想を頂くとやる気が出ますね（笑）

急展開（？）の話です

かなり難産でした

誤字訂正しました

第七話

side other

「それで俺に組織に入れ、と」

「そういう事だよ。」

説明を聞いてロトは、ふーっと長いため息をついた。

フェイトの話は、要約すると魔法世界の魔力が減って来ていて直に滅びる運命なのだが其れを阻止するのを手伝ってくれと言うモノだった。

ロトは日本で勢者必衰の理とか言う言葉が在ったな、とぼんやり考えながらコーヒーを口に含んだ。

お互いに、フェイトが持ち込んだコーヒーちびりちびりと飲むが、何も喋らない。その時間は何秒、何分、何時間だっただろうか？

長い沈黙の後、漸くロトが口を開いた。

「“全は一、一は全”と言う言葉を聞いたことがあるか？」

「…………いや、無いね。」

話に全く関係無い事柄を尋ねられたので、フェイトは疑問に思いながらも答えを返す。

「俺ら人は一人一人はちつぽけな存在で、大きな“流れ”の中の一つで、その“流れ”を“世界”と言うのか、“時間”と言うのかはわからない。だが、その一つが集まって“流れ” すなわち全は存在するって考えだ。」

「成る程、それで“全は一、一は全”か。」

フェイトは納得したように頷くが、まだ言いたいことが見えていないようだ。

「まあ、簡単にいうと俺には大きすぎるって話だよ。」

それに、ロトは百年ちよつと生きて来た。辛い事は沢山在ったが楽しい事も同じく沢山あり、ギルドの仲間達とも楽しくやってきた。勿論、まだ生きれるならば生きていたいが、もし今此処で死んでも、俺はここまでか、と納得して死を受け入れるだろう。

「君がそう考えても、君にはそれを出来る力があるんだよ。」

それを聞いて、ロトは苦笑して俺には先にやらなければ行けない事がある、と口に出した。

「やりたい事ってなんだい？」

「戦争を早期終結させる。」

「……………そうか。」

フェイトの表情がピクリと動いたが、ロトはそれに気付かず、第三皇女の護衛もあるしな、と再び苦笑しながら付け加えた。

フェイトは戦争の話については何も言わず、その後またお互いに喋らない時間が流れた。

「……………そろそろ僕は行くよ。」

「おう、悪いな協力出来なくて。」

「そう言っただったら手を貸して欲しいね。」

「冗談言つな。」

飲み始めてから意外と時間が経っていた様で、完全に冷めてしまったコーヒーを飲み干してフェイトは席を立った。

ロトも部屋の外まで見送る為に腰を上げ、冗談を交えながらドアを開ける。

「じゃあ、良い夜を。」

「ああ、お休み。」

そう言ってフェイトは静かに誰も通らない廊下を歩いていった。

余談だがロトは城で見かけないし、面識の無い人物が何故部屋を特定出来たのか首をひねっていたとかいないとか。

side ロト

「ロト！外に行くぞ！」

何時もの様に会議室の前でテオを待っていて、部屋から出てきた
と思ったらテオがそんな事を言い始めた。

「はあ？」

「どっしたんじゃ？早く行くぞ！」

「おいおい……………何処に行くんだよ？」

このじゃじゃ馬姫の破天荒振りには苦労させられるぜ……………。

ドランに乗つけてやる事ぐらいはお安い御用だったが、ヘラス帝
国の守護獣である龍樹に乗せるとか宣った（のたまった）時に思わ
ず拳骨でぶん殴ってしまったが俺は悪くない。俺は別に龍を使役し
ている訳じゃねえんだよ。

「ウエスペルタティア王国の王女と会談をするのじゃ。」

辺りを見回して、周りに聞こえないようにテオはそう囁いた。

「……………随分まともな用件じゃないか。」

「妾をなんだと思ってるのじゃ!?!」

「城の外に遊びに行きたがるじゃじゃ馬姫。」

ムガーと言ってポカポカ叩いてくるテオを押し留める。何げに痛いぜ。

「それで、どうやって行くんだ?」

「勿論、ドランじゃ!」

「……」。

「……めんな、ドラン……。アッシーなんかにして……」。

「グルルルルル……………」

ドラランに詫びながら撫でてやるよ。ドラランは気に入るなと言いつつに唸る。お前は好い龍だよ。

「何をやっておるのじゃ？早く行くぞ。」

そのままドラランを撫でているとテオが催促してくる。

「ごめんな。じゃ、おとなしく待っていてくれ。」

「フシューッ！」

ドラランが、蛇みたいな鳴き声(?)で応えてくれたので俺とテオはドラランを外に残して、会談に指定された建物に入っていく。

「そう言えば、ウエスペルティアの王女ってどんな奴なんだ？」

「そうじゃの…………噂だが、かなり美人らしいの。」

「ふーん。」

「どうしたのじゃ？興味が湧いたか？」

「別に。」

ニヤニヤしながら問いかけるテオを俺がバツサリと切り捨てるとつまらなそうに鼻を鳴らす。

この体は三大欲求である、食欲、睡眠欲、そして性欲がある程度抑えられる。恐らく、賢者の石のおかげなのだろう。

だから、限度はあるが、1日か2日は寝たり食べたりしなくてもいいし、美人だからうんぬんって事もない。

……………ぶっちゃけ、かれこれ百年ちよいち生きていると周りは皆年下だから精々、妹ぐらいにしか思わないし。

「着いたぞ。」

グダグダと色々考えて居るうちに、目的地に着いた。

そして、部屋を開けた先に待っていた王女は、

「はじめましてじゃな。妾はヘラス帝国第三皇女、テオドラじゃ。」

「お初にお目にかかる、テオドラ皇女。妾がウェスペルティア王国が王女、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアじゃ。」

本当に美人だった。

「
」

「む？テオドラ王女、其方の男は？」

思わず、口笛を吹いちゃった……。

「この男は妾の護衛のロトじゃ。」

「お初にお目にかかる、アリカ王女。俺はロト・ドラゴニクス。一応テオドラ皇女の護衛として随伴してきた。よろしく頼む。」

会談　とはいえ、戦争終結の為の交渉だ。少し無礼だが威圧感を放ちながら名を名乗る。

「ほお、アレフガルドの初代ギルドマスターである“隻眼の龍騎士”か。噂は聞いている。」

「アリカ王女に名を知られているとは光栄だな。」

アリカ王女は俺の放った威圧を齒牙にもかけずに握手を求めた。これには俺も少し驚いたが、尾首に出さずに手を差し出して握手をする。ところで、噂ってなんだ？

「早速ですが、テオドラ王女。この戦争についてですが」

テオのアリカ王女との会談は事実上失敗だったらしい。詳しい事はわからんが、話が平行線を辿ってしまったらしい。

「あーアリカ王女。」

「む？なんじゃ？」

「さっき言った噂ってなんだ？」

別れ際に、噂について気になったので聞いてみる。ちょっと怖い

「妾が聞いた話だと……………」

曰く、圧倒的な魔法（呪文）で賞金首をねじ伏せる。

曰く、魔法の射手は全てたたき落とされてしまい効かない。

曰く、敵を仕留めた後使役している龍に食べさせる。

曰く、欠損している右目と相性の良い目を探し求めている。

「……………orz。」

「ど、どうしたのじゃ！？ロト！」

話を聞いて、orz状態になる俺を見て慌てるテオ。ちょっとほつといてくれ。

目を探し求めているって何だよ……………何処の鬼畜だよ……………他のことは大体合ってるが……………何か納得いかない。

「ま、まあ元気だせ。そんな事もよく有るだろう。」

アリカ王女も慰めてくれてるのは判るが、全然フォローになってない。

その後2、3言、話をして戦争の早期終結の意志は変わらない事をお互いに確認して面会は終了になった。

“赤き翼”と言う団体が連合側に着いてから、帝国が劣勢になってきた。何でも、人数は10人にも満たないが一人一人が一騎当千の力を持つらしい。

んで、帝国上層部は赤き翼を俺とドランで対応させる決定をしたらしく、皇帝陛下じきじきに言い渡された。

「済まんの。儂が上層部を抑えきれんばかりに、テオドラの護衛役のお主に迷惑がかかってしまい……………」

「陛下、私も戦争を早く終わらせたい所存です。私の身で有れば喜んで国に捧げます。」

正直言つて、俺の本職は賞金稼ぎであって戦争屋では無いので、めんど被りたい。

賞金稼ぎには賞金稼ぎのプライドが有る。

だけど、帝国に借りを作るのもいいし、何より賢者の石のおかげで俺が死ぬ事は絶対と言っていていい程無い。

メリットは有り、デメリットは皆無。

ただの、己のプライドの問題なんだ。恩が売ればギルドにも、より帝国から依頼が来るようになるだろう。そして、早く戦争を終わらせたいのも本音だ。

ならば、俺は個人的なプライドは捨てる。

「忝い……………」

陛下が申し訳なさそうに頭を垂れる。改めて、この人は本当にいい皇帝だと思つう。

民を想う気持ちがひしひしと伝わってくる。

ならば、俺はその期待に応えてみせる。

「ロト・ドラゴニクス、誠心誠意陛下のご期待に応えて見せます。」

俺は陛下の前に跪いて、そう誓った。

S i d e o u t

S i d e テオドラ

「ロト……………」

「ん？テオか。どした？」

父上の部屋から出て来たロトは何事も無いように、呑気に笑いながら妾の頭を乱暴にワシワシと撫でる。

ロトはこのような事をたまにやり、痛いのが何故か安心出来る。だが、妾は今のこの行為が只の誤魔化しで有ることがわかる。

「戦争に行くのじゃろ?」

「……………ああ。」

ロトは問いかけると、ピタリと撫でるのを止めて真面目な顔になって答えてくれた。

急に景色がボヤケてくる。

「おいおい……………こんな事で泣くなよ……………」

「泣いてなんか無いのじゃ……………」

強がってはいるが、何故か涙が止まらない。そのまましゃくり上げると、ロトがしょうがねえなど呟くのが聞こえた。

「いよいよいよいよ。」

「ふえ!?!?な、何するのじゃ……………」

急にロトが妾を抱き上げて、子供をあやす様に背中を叩く。妾は子供じゃ無いのじゃ！

……………でも安心出来るのじゃ。

「落ち着いたか？」

「……………うむ。」

落ち着きはしたけど、恥ずかしいのじゃ……………。

「ならよかった。」

ロトはそう言って抱き上げていた妾を下に下ろした。

「あ……………」

「ん……………」

「な、何でもないのじゃ……………」

べ、別にもうちょっと抱き上げてられていたかった訳じゃ無いぞ！

「んで、何か聞きたい事があつたんじゃないか？」

そつじや……………妾が聞きたい事は……………。

「ロトは死ぬのは、怖く無いのか…………？」

side out

side ロト

「死ぬのが怖い？」

「そつじや。」

テオが随分真面目な顔で問いかけてくる。
死ぬ、ねえ……………。

「全然。」

「何でじゃー!? 皆に会えなくなるのだぞ!？」

テオが泣き出し、顔が涙でグズグズになる。

本当にしようがねえな……。

「いいかテオ。俺はこんなところで死なない。死ぬなんて事、毛ほど思ってたねえよ。」

「それじゃあ答えになってないのじゃ……………」

テオの頭を撫でながら、諭す様に話す。テオが正論言ってるような気がするが知らん。

「うっせ。隻眼の龍騎士がこんなところで死ぬ訳ねえって事だよ!」

「!?!」

答えになって居ない様な答え。だが、今はそれでいいんだ。

「そうじゃな。ロトが死ぬ訳無い！」

「そう言うことだ。」

よし、もう大丈夫だな。

「じゃあ、俺はもう行くぜ。ちゃっちゃと片付けて来るから待ってるよー！」

「待つんじゃー！」

う………なんか照れくさくなったから逃げようとしたのに……。
なんか呼び止めたテオの顔も赤いし。

「妾と仮契約をするのじゃー！」

「………は？」

仮契約？

「だ、駄目なのか？」

テオがまた泣きそうになってる。お前今日異常に泣きやすいな……

……。
って言うかぞ、

「仮契約って何？」

「……………は？」

「え？」

「……………。」

な、なんなんだ？

んで、テオに仮契約についての説明を受けた。簡単に言うと、仮契約すると従者に強い武器が与えるぞ、みたいなのらしい。

「よし、仮契約するのはいいがどっちやってするんだ？」

「……………ス」

「んあ？」

聞こえねえぞ。

「キスじゃ！キス！」

……………ナンデスト？

「マジか……………。」

「ロトは妾とキスするのは嫌なのか？」

そんな涙目で言われてもなあ……………。

「あ……………俺は別に良いが、お前は俺とキスなんかしていいのか？」

「ロトとなら大丈夫なのじゃ！」

その発言は聞こえようによっちゃあ、とんでもないぞ。
深く追及はせんがな。

「じゃ、仮契約するぞ。」

「……………うむ。」

俺は魔方陣の書き方なんて知らないので、テオが書いて陣の上に立つ。

そして、かがんでテオの唇に自分の唇を重ねる。

「んっ……………」

テオ……………艶っぽい声を漏らすな。

「これが仮契約バクティオーカードか。」

「早く出してみるのじゃ！」

カードには俺がドラクエで見覚えのある剣を胸の前で掲げて、抜刀敬礼をしている絵が描かれていた。

「そう急かすなつての。 アデアット。」

そう呟くと出て来たのは、鏢の部分が翼を広げた金色の鳥を模していて、神の金属と言われるオリハルコンで作られた西洋剣
ロトの剣だった。

バクティオーカード
仮契約

- ・名：ロト・ドラゴニクス
- ・称号：隻眼の龍騎士
- ・主：テオドラ
- ・色調：青銀
- ・方位：北
- ・星振性：太陽

・アーティファクト：
オウジャノツルギ
王者の剣

「ふむ。この剣は“王者の剣”というらしいの。魔属や悪魔に絶大な威力を発揮し、勇者の雷の威力を高めるらしい。随分凄いのを引いたのじゃー！」

「……………そうだな。これもテオのおかげだな。」

「当然なのじゃ！」

本当にこんな代物が出てくるとは思わなかったな。
まあ、とりあえず

「テオ。」

「なんじゃ？」

テオを読んで、俺はカードに描かれている様に抜刀敬礼の形を取って、

「第三皇女テオドラの従者、ロト・ドラゴニクスは我が騎士道に掛けて、主である貴方の所へ帰ってくると誓おう。」

そう言い放った。

「……………わかったのじゃ。ちゃんと帰ってくるのだぞ。」

「ああ。」

紅き翼と隻眼の龍騎士の衝突は免れない。

第七話（後書き）

今回は丸々一話使って紅き翼と戦います

あとちよいとパクティオーカード補則

星振性は、太陽が西洋星占術において、獅子宮の守護星で、意味するものは個人的な力・活力と成功・指導力・権威・父性・創造性などです。

個人的な力や成功、指導力の部分で決めました。

方位は、黒龍が五行思想においては黒は北と同じく水に対応するので、黒龍を玄武と同様、『北方を守護する神聖な竜』としている説がある為、北にしました。

ヒロイン投票はまだまだお待ちしておりますので気軽に投票してくださいm(_____)m

感想や意見等もよろしくお願いします

第八話（前書き）

紅き翼との戦闘です

かなり気合いを入れて書きました！

誤字訂正しました

第八話

side 口ト

「なんだかなあ。」

「グルルルル……。」

賞金稼ぎの身で有りながら、戦争に参加する事になった俺。場所はグレートブリッジという馬鹿デカイ橋だ。

戦争をさっさと終わらせたいと思いつつも、プライドの問題でやる気でない現状に苦笑を禁じ得ない。

ドランも余り、乗り気で無いようだ。

だが、依頼は依頼だ。

「ま、頑張つて行こうぜ。俺は紅き翼の連中をメてくるから、周りの奴らの牽制を頼む。」

「ヴオオオオオ！……！」

ドランをポンポンと叩くと、了解したようで雄叫びを上げる。そ

れを聞いて満足した俺はドランから飛び降りて、着地兼挨拶代わりに呪文を発動させる。

「派手に行こうぜ！！《バギクロス》」

s i d e o u t

s i d e ナギ

よお。俺は最強の魔法使い、ナギ・スプリングフィールド、又の名を千の呪文サウザンダマンターの男だ。

今、俺達“紅き翼”はグレートブリッジにいる。

「ジャック！！どっちが沢山艦を落とせるのか勝負しようぜ！！」

「良いぜ！勝つのは俺だ！！」

「お前ら真面目にやれ！！！！」

堅物詠春がまた何か言ったら。

「詠春もするよな？」

「する訳無いだ」「負けるのが怖いのか？」「よし！良いだろうっ！！」

おし、詠春もヤル気になったな！

「バカじゃな。」

「フフフ……。」「お師匠とアルも大丈夫だな。」

「じゃあ紅き翼、出撃だ！！」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「ん？ありやなんだ？」

上を見上げてたラカンが何か見つけたみたいだな。同じように見
てみると、黒いものが帝国側から飛んできた。

「ありや黒龍じゃな。龍種の中でも高位に位置する龍だった筈じゃ。」

へえ、面白そうじゃんか！

「ならばっ倒せばいいんだな！」

「止める馬鹿！！」

「黒龍ですか……………」

詠春つつせえぞ。アルも何か考え込んでるし。

「おい、何か黒龍から落ちてくるぜ！」

「はあ！？」

何かってなんだよ！？

「あつぶねえ！！皆大丈夫か！？」

俺達が元居た場所には大きな2つの竜巻が吹き荒れていた。
嫌な予感かして咄嗟に避けたが、ちよつと遅れたら、斬り刻まれ
ていただろう。

竜巻が止むとそこには、右目に眼帯をした1人の男が立っていた。

「よお。お前らには悪いが、ここで足止めさせてもらつぜ。」

「誰だ、てめえ！！」 そいつはフツと笑った後、名乗りあげた。

「 ロト・ドラゴニクス。」

side out

side other

「やはり……ですか。」

「あん？アルは知ってるのか？」

納得した様に呟くアルビレオ・イマに疑問を持ったナギが尋ねる。

「ロト・ドラゴニクス。“隻眼の龍騎士”や“呪文使い《スペルマスター》”等と呼ばれる凄腕の賞金稼ぎで、アレフガルドの初代ギルドマスターじゃ。……黒龍を従えとるのは本当だったようじゃな。」

ナギの質問にアルビレオの代わりにフィリウス・ゼクトが答える。

「……そうか。」

「お前全然わかってないだろ。」

ゼクトの説明を受けて、とりあえず了承の言葉を吐いた様子のナギに詠春が呆れた顔で突っ込む。

「とりあえずコイツが敵ならぶっ倒しやあいいんだろ！！」

「……………まあ、敵なんだけどさ。」

ナギと同じく良くわかってないであろうジャック・ラカンに締められない雰囲気で微妙な表情のロトが答える。

「ならばっ飛ばすだけだ！！行くぜ！ 雷の暴風！！」

ナギが無詠唱で雷の暴風を放つと、詠春は愛刀である夕凧を手に疾走する。

「無詠唱か。《メラゾーマ》」

いきなり魔法を放ったナギに、ロトはマルチタスクで魔力を込めて、発動しないように制御していた呪文を解放する。

「おわっ！？」

「破ッ！」

雷の暴風は最高位火炎呪文であるメラゾーマに拮抗もせず呑み込まれナギに殺到するが、ナギは慌てて障壁を張り火球を防ぐ。

詠春もロトに斬り掛かるが、夕凧は隼の剣に阻まれる。

「くっ！強い……！！」

「ちい！！詠春を盾に……！！」

詠春は一太刀斬り合った所で、ロトの実力を見抜いた。

ロトの剣術は、どこの流派にも属さない我流だ。それは、何百回もの賞金首との戦闘で積み重ねて来た経験から剣を振っている唯一無二のオリジナルである。

尋常でない動体視力と反射神経、急な動きに対応出来る肉体。それによって創られた剣撃を詠春は必死で捌いていた。

しかも、瞬動で眼帯で覆われていて死角になっている右側に回り込もうとする詠春に、純粹な身体能力で付いてきている。

ロトは詠春を軸にしてラカンを対に置くように立ち回って居るので、ラカンもアーティファクトによる剣の投擲も出来ないでいた。

「斬岩剣……！！」

「隼斬り……！！」

「があっ……！！」

「くっ!!」

ロトは詠春と斬り結ぶ中で、隙を突いて隼斬りで放つが、詠春もギリギリで反応して斬岩剣を放った。しかし、詠春の方が後手に周り更に隼斬りの剣撃は2回なのに対して斬岩剣は1回。

詠春は完全に一撃貰って、ふっ飛ぶが、ロトも力を乗せた一撃で怯んでしまう。

「っ!?重力魔法か!!」

「ナイスだ、アル!

百重千重と 重なりて 走れよ 稲妻 千の雷!!」

「千の雷!」

「斬艦剣 !!!!!」

しかし、ロトは剣技を放った反動で出来た一瞬の隙にアルビレオの重力魔法に捕らわれてしまう。その隙を突いてナギ、ゼクト、ラカンが最大攻撃を叩きつける。

「やったか?」

「へっ！あの一撃を食らって立ってちゃいねーよ！」

「ゴホッ！……………油断するな！」

ロトを倒したと考えたナギとラカンが軽口を叩くが、ロトと斬り結んでその強さをその身で感じた詠春が先程のダメージから復活して、油断なく警告する。2人も大人しく従ってもうもうと煙る煙幕を注視していると、

あーあ。きつついなあ……………

「「「「「！？」「「「「

「 1回死んじまったよ。」

煙が晴れて、そこから出てきたのはボロボロだが何故か余裕綽々のロトだった。
しかも、

「 なっ!?!? 」

「 傷が……………。」

ボロボロだったロトの肉体が光（錬成反応）と共に回復していく様子を見てナギや詠春は呆然とする。

「 バグか……………。」

「 バグじゃの。」

「 バグですね。」

賢者の石の効果でなく、純粹な能力であると信じた赤き翼の面々

はバグキャラ認定もしていた。

「（異世界から飛ばされたからバグっちゃあバグだが）数の暴力とはな………本気でやらせてもらうか。多重起動バイキルト《スカラ》《ピオラ》
《！》」

「ちい！！身体強化の呪文のようじゃ！気を付ける！」

「（いい推理力だな……。）」

ロトはマルチタスクで身体強化の呪文を何種類か掛ける。

するとロトの周囲を魔力光が覆う。それを確認してゼクトが呪文の種類を判断するのを見て、ぼんやりと関心していた。

更に、ロトは右目を隠している眼帯を取り外して隼の剣を袋に収納。テオドラとの仮契約カードを取り出し、

「 アデアット。」

オウジャノツルギを手取る。

「本気モードだ。」

来い。」

第2ラウンドが始まった。

しかし、幕切れはあっけなかった。

「
疾風突き」

「なにっ！アル!？」

ロトは持つ技の中で最速の攻撃である疾風突きで、重力魔法が厄介なアルビレオを仕留める。

バイキルト、ピオラで強化された一撃を避けられる筈が無くアル

ビレオは、あっさりと倒される。

「くっ！」

「どけ詠春！全力全開、ラカンインパクトオ！！」

詠春が再び斬り掛かるうとする所をラカンが止め、全力の一撃を放つ。

「五月雨、爆烈斬」

「なっ！？」

「くっ！障壁 最大防御！！」

しかし、ロトは対多数攻撃である五月雨斬りをイオ系統の魔力を載せて一点集中、

ナギは無詠唱で千の雷が出せない為詠唱に入り、詠春がフォローに入る。

「遅い！！」

「くっ！さっきとは桁違いか……！！」

しかし、身体能力が上昇したロトに歯が立たず、辛うじて斬り合えている状況だった。

「神鳴流決戦奥義」

「ギガ」

斬り合うのは無理と判断した詠春は自分が出来うる最大の攻撃をするために気を溜める。すると、夕凧の刀身が雷を纏い始める。

ロトもオウジャノツルギに勇者のみが使える神の雷の力
イン系統の魔力を込める。こちらも、雷を纏い始める。 デ

そして、2つの雷撃が衝突した。

「雷光剣!!!」

「ブレイク!!!」

“雷”と“神の雷”は撃突し、“神の雷”は“雷”を屈服させて詠春を飲み込んだ。

「詠春っ！クソッ！！」

百重千重と重なりて 走れよ 稲妻 千の雷！！」

「終わりだ《ギガデイン》」

詠唱を終えたナギの千の雷とロトのギガデインがぶつかり合う。

「おおおおお！！！！！！」

「うお！？」

あっさりとギガデインが打ち勝つだろうと思っていたロトは、思いもよらぬナギの底力に驚愕する。

しかし、

「まだまだ、だな。」

「なっ！？」

ロトが少し魔力を込めると、その拮抗はあっさりと崩れ去り、雷はナギへ殺到した。

「任務完了っな。」

戦闘が終わった其処に立っていたのは、ロト1人だった。

「さて、帰るか。」

ロトは他の兵士を潰していたドランを呼び寄せ、

「ヘラス帝国首都へ《ルーラ》」

テオドラの待つ城へ戻った。

この戦いで、紅き翼は1人の騎士に敗北した。しかし、連合の優勢は覆らずグレートブリッジは奪還されてしまったのだった。

第八話（後書き）

10月14日午後10時時点でのヒロイン投票の途中結果です

千鶴 四票
朝倉 三票
エヴァ 四票
茶々丸 一票
アキラ 三票
裕菜 二票
真名 七票
アスナ 四票
木乃香 五票
刹那 四票
夕映 四票
宮崎 二票
千雨 四票
ドラゴン 一票
無し 一票

まだまだ投票お待ちしておりますので気軽に投票してくださいm)

——) m

同時に感想や意見等もよろしく願います

第九話（前書き）

最終確認してたら途中の部分が消えて本気で焦った……

ちよつと質問なんですけど、ホークアイ中尉が作中で使ってたライフルって実在するんですか？

第九話

side ロト

紅き翼の連中を死なない程度にあしらってから、ヘラスに帰ると何故かテオが泣きながら抱き付いてきた。正直、焦った。

んで、俺は紅き翼を倒した男として帝国の英雄に祭り上げられてしまった。ま、大方兵士の士気向上の為だろうけど。

ギルドはギルドで“一代目の出世記念だ！”とかなって俺は勿論、テオも巻き込んで大騒ぎになった。

このギルドはお祭り好き(?)と言うか、騒ぐのが大好きな奴らで ああ此処は俺の家でこいつらは俺の家族なんだな、と実感して凄く心が温かくなった。

で、

「またか？」

「そうじゃ。」

テオがアリカ姫と会談の為に、また外に出るとか言ってる。

別に俺は構わないが、バレるとテオの世話役に怒られるのは俺だから勘弁して欲しい。

俺は護衛であって、お目付け役じゃ無いっての。

「今度は何を謝りに行くんだ？」

「何もしてないぞ！謝る事なんて無いのじゃ！」

お前に振り回されて苦勞を掛けさせられる俺に謝れよ。

「テオドラ皇女、久方じゃな。」

「うむ、久々じゃの。」

会談の場所に行くと、アリカ姫は既に到着していてテオと挨拶を交わす。

アリカ姫が若干やつれている様に見えるのは、気のせいではないだろう。あの国は帝国とメガロに挟まれているから苦労するだろうな。

因みに、会談の内容は戦争の裏で糸を引いて戦いを長引かせている組織があるらしいく、お互いの情報を照らし合わせて、対策を立てることのこと。

「貴公も息災なようじゃな。」

「ちよいと駆り出されたが、大丈夫だったよ。」

テオと挨拶をして、俺にも声をかける。それより、聞きたい事が一つ。

「アリカ姫、護衛は連れてこなかったのか。」

「うむ。極秘の会談じゃからな。」

ふむ……………。

「おいおい……………襲われたらどうするんだよ?」

「その時はお主が守ってくれるのじゃろう?」

「……………善処しよう。」

何言ってるんだこの女王様は……………。

「
それで、MM連合のNo.2もその組織の一派なんじゃないかな?」

「うむ。かなり奥深くまで入り込んでいる。下手したら我が国の上層部も黒じやろう。」

俺は、会談をテオの背後から聞きながら自分なりに考えている。
……………しかし戦争の長期化の理由がわからん。何かモヤモヤする
感じがあるんだが……………。

「目的は何かの?」

「わからぬ。戦争による利益で甘い汁を啜ろうとする人間達の組織とは考えにくい。」

テオの疑問にアリカ姫が忌々しげに答える。

「帝国・連合が疲弊した所から漁夫の利を掠め取ろうとする………
と言つのが一番有力じゃな。」

「うむ。今回はこんな所かの。」

「と、アリカ姫。その組織の名前は？」

「おいおい。わからなかったから、“組織”って呼んでるんじゃない無かったのかよ。」

「その組織の名は 完全なる世界じゃ。」

この時、俺は力チリとピースがハマる音を聞いた気がした。

s i d e o u t

side アリカ

「 今回の会談はこの辺で終わりかの。」

「 そうじゃな。」

とりあえず、完全なる世界という組織が戦争の裏で動いているという事実の確認と、今後は定期的に連絡を取り、対策を練るという事で終了になった。

はあ……………我が国は帝国と連合に挟まれて大変だというのに、また厄介事が増えて……………。

「では、定期的な連絡を「アリカ姫」……………なんじゃ？」

呼び止められる理由がわからないので、思わず不機嫌な声になってしまった。テオドラ皇女に目をやってみるが、同じく理由はわからないらしい。

ロトはつかつかと此方に向かって来て、右目の眼帯に手をかけて外す。そして、閉じていた右目を開けると

「「なっ!?!」」

右目には、アレフガルドのシンボルマークである、とぐるを巻いた竜　　ウロボロスが刻まれていた。

「口、口ト！その目は何なのじゃ！？」

テオドラ皇女も初めて見る様で、かなり狼狽えている。そう言う妾も充分驚いている。驚き過ぎて声が出ないだけだ。

「この目は、気や魔力、風の流れなどが見える目だ。俺は“王者の目”と呼んでいる。」

「何と……。」

「凄いのじゃな……。」

その目ならば認識障害等も見破れるのじゃろう。

「便利なんだが、こんな風貌だから迂闊に見せられないんだよ。ギルドマスターとしてギルドの中で、動く時は外しているがな。」

成る程。眼帯を付けている時はプライベートという印か。

「それで貴殿は何故、今外したのか？」

「ああ、アリカ姫。ちよいと失礼。」

ヒュッ

「!?!」

「なあ!?!な、何故アリカ王女を斬ったじゃ、口ト!?!」

「テオ、落ち着け。」

言葉も出なかった。確かに口トは腰に刺してある剣で妾を一閃した筈だ。しかし、妾には目の前を一本の線が通ったとしか認識出来なかった。

「お、お主、完全なる世界の手先か!?!次は妾を斬るのか!?!」

「落ち着けテオ!アリカ姫をしてみる!?!」

ロトの一喝でテオドラ皇女も妾も我に帰り、妾の体を確認してみ
るよ、

「傷が……無い？」

「そうだよ。俺が斬ったのはこっちだ。」

と言われてロトが指を指す先を見ると其処に在ったのは、真
っ二つになった機械。

「ロトよ、これは何なのじゃ？」

「一定の時間の周期で特殊な魔力を発する機械だ。差し詰め発信機
と言った所か。」

と、言うことは

「着けられていたのか………!!」

「流石だね。隻眼の龍騎士……。」

「来たか……。」

はっ、として出口の方を見るとそこには白髪の無表情の青年が佇んでいた。

side out

side other

「何時から気付いてたんだい？」

「最初っからだよ。賞金稼ぎナメンじゃねえ。」 出口に構えもせず、自然体で立っているフェイトが静かに尋ねると、ロトが然も当然という風に答える。

ロトは数十年の時を賞金稼ぎとして生計を立て、危険な賞金首を捕まえてきた。

賞金首は正面から突っ掛かってくる者も居れば、人質を捕る者、隠れて奇襲を狙うのもいた。それを幾度となく捜し出したロトにとって、この程度の索敵は朝飯前だ。

「心配が僅かに漏れていて、それでいて此方を見る視線はしっかりと感じた。んで、アリカ姫は護衛は連れてきてないと言うじゃんか。其処から、問題の組織　完全なる世界の人間と判断した。俺とテオがアリカ姫と接触しても仕掛けてこないのは、どこまで情報を掴んでいるかを把握しているか泳がせたってトコか？」

「貴殿は本当に凄いのじゃな。」

「むー……。何故それを妾達に教えてくれなかったのじゃ!!」

「少なくともテオは動揺して自然に振る舞えなくなるだろ！」

アリカがロトの推察を聞いて、感心した様に呟くがテオは自分にそれを教えてくれ無かった事が不満らしく、ロトに飛び付きながら文句を言う。

「……………君は紅き翼を倒す實力を持ち、知力や洞察力にも長けていて本当に規格外だね。」

「なっ!?!お主ナギ達を倒したのか!?!」

「おう。殺しては無いぜ。」

「あ奴らが妾の協力者なのだぞ！」

「……………マジか。」

「ロトは紅き翼なんぞより、ずっと強いのじゃ！」

「テメエはややくしくなるから黙ってる!!」「ゴッ

「痛いじゃ！ロトが殴ったのじゃー！」

フェイトの紅き翼の発言により、事情を知らなかったアリカが問いつめ、ロトが焦り始めてテオが更に引っ掻き回す。
あつという間にカオスになった。

因みに、アリカが紅き翼が負けた事実を知らないのは連合側が士気の低下を防ぐために箝口令を敷いたからだ。

「それで、ロト・ドラゴニクス。やはり君は惜しい人材だ。此方に来ないかい？」

「断る。俺はこんなクソツタレな戦争はさっさと終わらせたいんだ」

「……………そうか、残念だよ。」

ヴィシユタル・リシユタル・ヴァンゲイト

ロトはフェイトの勧誘をにべもなく、断る。フェイトは交渉の余地が無いと判り、魔法の詠唱を始める

「ちっ！潰すしかないか……………離れてろ！」

ロトはフェイトが口封じにかかるると判断して、アリカとテオを下からせる。

オウジャノツルギを呼び出し、そのままフェイトに向かって疾駆する。

「おお 地の底に眠る 死者の宮殿よ 我等の元に 姿を現せ」

「ギガ」

ロトはフェイトに接近しながら、デイン系統の魔力をオウジャノツルギに送り込む。すると、剣は雷を纏い始める。
そして、

「冥府の石柱」

「スラッシュ!!!」

ドゴオオオン!!!

迫りくる巨大な石柱を雷を纏った斬撃で正面から迎撃し、それを岩の破片へと変える。

ロトは更にその岩の破片を足場にしながら、フェイトに肉薄する。お互いの技の衝突によって生じた粉塵は、双方の姿を多い隠している。しかし、ロトはその右目で空気の流れを“視て”、流れの不自然な所にアタリを着けて飛び掛かる。

「呼ばれて飛び出て!!!」

「っ!? 障壁突破 石の槍」

「甘い!!!」

粉塵の煙幕から奇妙な向上を述べながら、飛び出してきたロトに驚愕しながらも牽制の為に石の槍を投擲する。しかし、ロトは体を捻るだけで躲すと右手に持つ剣では無く、無手の左手に魔力を込め

てフェイトの胸の辺りに掌底をたたき込む。

「ハートブレイク！」

「くっ……。！？体が動かない。」

ハートブレイクは魔力を込めた掌底を当てる技だ。

普通、人が内包している魔力は個々で質が微妙に違う。

質が違う魔力を強引にたたき込むので普通に取り込んだならともかく、無理に取り込まれた質が魔力が体の中で暴れまわり、魔法は発動しにくくなる。

叩き込む魔力量を調整すれば、体の自由を奪ったり魔力暴走を起こす事が出来る単純だが意外と上げつない技だ。

「無駄だ。ハートブレイクは相手の自由を少しの間奪うんだよ。じゃ、その後に俺達はトンズラ扱かせて貰うぜ！」

ピイイイイ！！

そう言い放つとロトは二本、指を啜えて口笛を吹く。
するど、

「ヴオオオオオン！！」

口笛を聞き付けたドランが天井を突き破って現れる。事実を察したテオとアリカは降りてくるドランの手に乗り、ロトも大きく跳躍してドランの頭に飛び乗る。

「See you next time！！」

ロトはフェイトにそう言い放つと、ドランを飛翔させレムオルを使って大空に溶け込んだ。

テオとアリカは二度会いたくないとぼやいていたのは、余談である。

おまけ

「そつえば、ロトよ。何故にフェイトの名前を知っておったのじや？」

「うむ。妾も気になるの。」

「あん？そいつはアレだ。城までアイツが勧誘に来たからだ？」

「「はあ！？」」

「お主！やはり完全なる世界の一派か！！」

「ロト！城で何という事をしてるのじゃ！！」

「ちょ……………！アリカ姫！！テオ！！揺らすな！俺は違つっ……………
…馬鹿、押すな！落ち……………！うおおおおおお！！？」

第九話（後書き）

感想や意見等よろしくお願いします

ヒロイン投票10月17日午後6時、時点の結果です

千鶴	七票
朝倉	五票
エヴァ	六票
茶々丸	二票
アキラ	四票
亜子	二票
裕菜	二票
真名	十二票
アスナ	六票
木乃香	六票
刹那	五票
夕映	四票
宮崎	二票
千雨	九票
楓	一票
鳴滝姉妹	一票
ドラン	一票
無し	一票

まだ締め切りではありませんので、気軽に投票してください

第十話（前書き）

だんだんと大詰めに近づいてきました

第十話

S i d e
□ ↓

「賞金稼ぎが指名手配とはコレ如何に。」

「帝国でも手配されている様じゃな……………」。

何故か俺は賞金首として、指名手配になってしまった。罪状はテオとアリカ姫の誘拐。帝国と連合の両方に手配書が回っている。

何をしたのか知らないが、紅き翼の連中も指名手配になっていたりする。

まあ、俺は帝国では紅き翼を倒した英雄として祭り上げられていたし、皇帝陛下が事情を察してくれたのか、帝国での手配書の出回っている数は極僅かだ。

これでヘラス帝国の上層部にも完全なる世界の一派が居ることは確定だな。

「妾の注意が疎かだったばかりに……………申し訳ない。」

「気にすんな。起きたものは、しょうがねえ。」

それに、アリカ姫は一国の王であって、戦闘員でも無いのに、戦いのプロと言っても過言ではない奴らの気配を察知しると言う方が酷だろう。

「それよりさっさと行くぞ。テオ、アリカ姫。」

「うむ。」

「妾の事はアリカ、で良いぞ。妾もロトと呼ぶ。」

「わかった。」

ちょっとしたやり取りを交わして、俺達はモシヤスの杖と同じ要領で作ったレムオルの杖でレムオルをドラランに掛けると、ヘラス帝国の一つの街へ入った。

「お主の呪文とやらは、凄いな……………」。

「……………俺もそう思う。」

俺達はモシヤスを掛けて、街に入った。

姿を変えている為、俺達が王女ご一行だとは気付かれていない。

モシヤスは認識阻害と違って、完璧に対象に化けるので、振る舞いに注意を払えば周囲は本人と思いきむ。更に、レムオルを上手く使えば諜報活動もお手の物だろうな。

デメリットとして、肉体スペックや使える魔法も本人と一緒になることぐらいか。

「それはともかく、これからどうする？こんな事をしてる場合では無かるう。」

アリカが呆れた様な口調から一転して、真面目な話をする。

「それもそうだが、今は手詰まりだ。帝国も王国の“上”は“組織”の息が掛かっているし、人物は特定できない。」

壁に耳あり、障子に目あり　完全なる世界の連中が何処に居るかもわからないので、詳しい名前をぼかしながら話を進める。

「くっ！歯がゆいな……………！」

「そう焦りなさんな。今はガスを抜ける時に抜いとけ。」

アリカは今も自分の国が心配なのだろう。その姿勢は立派だが、適度に休んで置かなければ肝心な時にミスを犯してしまう。

それがわかって居るのだろう、アリカは不満そうながら頷いてくれた。

「もつとも……………」

言葉を濁して前を見ると

「アルス！ビアンカ！早く来るのじゃ！」

店を次々に回って大声を上げて、はしゃいでいる茶髪の女^{テオ}が居た。

「あそこ迄、羽目を外す事は無いぞ。」

「……………わかっておる。」

そうして、俺とアリカは精神的疲労を抱えながらテオを追いかけた。

「やっと見つけたぜ！姫さん！」

どうもロトです。

何故か、正体がバレたようで、現在進行形で絡まれています。相手はナギ・スプリングフィールドです。街へ行った帰り、ドランの所へ帰ろうとしていたら森から野生のナギが飛び出して来ました（笑）

他の紅き翼の面々が後ろから追っかけて来たから、一人で勝手に突っ走った様子だ。なんか子連れのだンディなオッサンが増えているし。

「ナギ、落ちつけ。この方があの方な訳ないだろう。」

「そうだぜナギ。あんなおっかない無表情女と見間違えるなよ！」

筋肉ダルマ、本人の前で悪口を言うな。アリカのこめかみがひくついでら。爆発寸前だぞ。

「いや！コイツは姫さんだ！俺にはわかる！」

「何を根拠に言ってるのですか？」

ローブを羽織った男が尋ねると、自信有りげに言い放った。

「勘だ！」

野生かっつての。

「……………妾はアリカ姫では無いぞ。」

アリカ、墓穴掘ってるぞ。ナギ達は一度も“アリカ姫”とは言っていない。

「ロト、どつするのじゃ？」

「バレたんなら、しょうがない。種明かしといくぞ。」

アリカとナギの問答を眺めていると、テオが声を潜めて尋ねくる。とりあえず、旨をテオに伝えて言い争っている二人を宥めにかかるとしよう。紅き翼が、アリカの協力者なら大丈夫だろう。

「アリカ、もういい。」

「アルス！？」

「アアン？誰だ！？」

ナギが今度は俺に突っ掛かってくる。チンピラか？コイツ……………
とりあえず、モシヤスの状態じゃ誰かわからないだろうから、指

を弾いて3人のモシヤスを解く。

「『『『『』なっ!?!』』』』」

「ロト・ドラゴニクス!」

褐色肌の筋肉ダルマやナギ、剣士風の男は直ぐ様、戦闘態勢をとる。オッサンやローブの男は訝しげに俺を見ている。

「テメエ! 姫さんから離れる!」

「やめるのじゃ、この馬鹿!」

「あべしっ!?!」

あ、ナギがアリカにビンタされた。キリモミみたいに回ってら。筋肉ダルマはそれを見て爆笑してる。まあ、見てて楽しいけど。

「ロトはテオドラ皇女の護衛で、妾の護衛もこなしてくれたのじゃ。

「

「そうなのじゃ!」

テオ、なんでお前が得意げにしてるんだ？

「そうだったんですか。警戒してしまつてすみませんね。」

そう言つて、歩み寄ってくるローブの優男。なんか信用できない感じの笑みを口元に浮かべている。

「いんや。しゃあないだろ。ちよつと前に自分をぶつ飛ばした人間が知り合いと居ちゃあ、警戒するもんさ。」

「そう言つてくれるとありがたいです。私はアルビレオ・イマ。アルでもお呼びください。」

「青山詠春だ。よろしく頼む。」

「俺はジャック・ラカンだ。」

「フィリウス・ゼクトじゃ。」

「ガトウ・カグラ・ヴァンデバーグだ。」

「ヘラス帝国第三皇女、テオドラじゃ。よろしく頼むぞ。」

アルビレオ　　アルが自己紹介をしたのを皮切りに、他の面々も名を名乗る。一応、俺も名乗るか。

「知ってると思うが、俺がアレフガルドのギルドマスターをやっているロト・ドラゴニクスだ。今はちよいとテオの護衛をしている。よろしくな。」

誰か忘れていている気がするが……………。

「俺を忘れるな!！」

お前か、ナギ・スプリングフィールド。アリカのビンタから復活したんだな。

とりあえず、ここは目立つから場所を移動する事にした。

s i d e o u t

タルシス大陸・オリンポス山

紅き翼の隠れ家があるというので、ロト達は街から移動してきた。移動速度はドランに乗った方が圧倒的に早いので、全員でドランに乗ってきた。ドランを見てナギとラカンが戦わせると騒ぎ始めて、アリカにビンタで文字どおり沈められたりしたのは余談だろう。

「何じゃ。これが噂の紅き翼の秘密基地か！」

「どんな所かと思えば……………掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ？このジャリはよ。」

「何だ貴様！？ 無礼であろう！」

「へっへ〜ん！生憎、ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでね！」

「むううう……………ロト！あの筋肉ダルマをやっつけるのじゃ！」

「勝手にやってる。」

テオとラカンがしようもない事でケンカを始めテオがロトに助け(？)を求めるが、付き合いきれないロトはにべもなく断る。

「あの子供が第三皇女なんですか……。」

「一応な。俺はあのじゃじゃ馬のお陰でどれだけ苦労した事か……。」

ラカンとテオが口喧嘩をしている所を見て、隠れ家で合流したタカミチ・Ｔ・高畑が咳く様に声を漏らし、それを聞き付けたロトは勘弁してくれとため息を吐く。

紅き翼の面々を圧倒的な実力で倒した男の煤けた姿を見て、アルヤガトウは苦笑を禁じえなかった。

「さーて 姫さん。こっからが大変だぜ。連合にも、帝国にも……あんたの国にも味方はいねえ。」

煤けたロトを同情の目で見ていたナギは気を取り直し、話始める。

「やはりそうか……我が騎士よ。」

「その“我が騎士”って何だよ、姫さん！？
クラスでいったら俺は魔法使いだぜ？」

「もう連合の兵ではないのじゃろ？
ならば主は最早、私のものじゃ」「な……………」。

「……………あれって遠回しな告白だよな。」

「……………まあ、そうなりますよね。」

アリカの無茶苦茶な発言にナギは絶句する。ロトとアルは、ひそひそと意図的か不明な爆弾発言について話していた。

「連合に帝国……………そして、我がオスティア。世界全てが我らの敵
という訳じゃな。」

「じゃが……………主と主の“紅き翼”は無敵なのじゃろ？
世界全てが敵　　良いではないか。」

「こちらの兵はたったの7人……………だが最強の7人じゃ。」

「ならば我等が世界を救おう。
我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ。」

「……………へっ。だから俺は魔法使いだっつーのに……………。
やれやれ……………相変わらずおっかねえ姫さんだぜ。」

呆れた様に喋るナギだが、それでもアリカの前に跪く。そして、アリカもナギの肩に剣を置くようにして掲げ、騎士契約の様な形を取る。

「いいぜ。俺の杖と翼、あんたに預けよう。」

そう、ナギは高らかと宣言した。

「して、ロトよ。」

「あん？」

騎士契約を終えると、アリカはロトの方を向く。

「今はこの世界の危機じゃ。無理と承知で頼む。力を貸してくれないか？」
頼む。」

「あ……………」

そう言ってアリカは深々と頭を下げた。ロトは困った様に上を向きながら頭を乱暴に掻き切る。

「正直言って、俺個人は世界の滅亡に興味はない。」

「なっ!?」「だが」……………」

アリカがその発言に何か言おうとするが、ロトがそれを遮って言葉が続ける。

「乗り掛かった船だ。最期まで付き合おうじゃねえか。俺と、アレフガルドは出来る限りの協力をしよう。」

ロトは不敵に笑いながら、言い放った。

「よしっ！じゃあ改めて宜しくなロト！」

「おつよ。」

様子を見ていたナギは嬉しそうに駆け寄ってきてロトと握手をする。

握手をするナギとロトに日の出の光が射した。

それは、新たな時代の始まりの光の様にも見えた。

第十話（後書き）

感想や意見等よろしくお願いします

10月21日午後7時時点のヒロイン投票の結果は、

一位：真名 14票

二位：千雨 10票

千鶴 10票

三位：木乃香 8票

四位：アスナ 7票

刹那 7票

エヴァ 7票

次点：

朝倉 5票

夕映 4票

アキラ 4票

茶々丸 2票

亜子 2票

裕菜 2票

宮崎 2票

ドラゴン 2票

楓 1票

鳴滝姉妹 1票

無し 1票

と、なっています。

投票はまだまだ受け付けていますので、気軽に投票してください
m ()

閑話（前書き）

唐突にドラムに焦点を当てた戦闘って書いて無いなーとか思ったので、急遽書き上げました！

ちょっとモンハンっぽかったり、地の文が多かったりします

それでは、どうぞ！

閑話

Side Note

「はあ？ドラゴンと戦わせるだあ？」

完全なる世界の拠点の一つを潰しに行った帰り、ジャックとナギが唐突に頼み込んできた。

今一緒に居るのは、ジャックとナギにゼクトとアル、俺だ。

普段は紅き翼の面々もバラバラに分かれてウチのギルドの連中を率いて回っている。

だけど今回の場所は規模は余り大きく無いが、敵の勢力がそれなりと言っ情報だったので少数精鋭の形で襲撃をした。

閑話休題

「何で急に言いだすんだ？」

「だってよお、敵が強いつて言うから期待したのに全然弱いし……」

ナギが口を尖らせながら不満そうに呟く。

確かに、このメンバーに対して敵の実力は明らかに足りてなかったな。物凄いオーバーキルだった。

「だが、ドランと戦わせろ！」

「お前らがヤルと“殺る”まで続けるからダメだ。」

「そこまでやらねえよ！あー、アレだ。」

「なんだ？」

ジャックが口籠もって何か言おうとする。

「えーっと……、そう！ネギ戦だ！」

「それいいな！ネギ戦しようぜ！」

「模擬戦じゃバカ者。」

ネギ戦って……………。

「ロト、それならば大丈夫じゃないんですか？」

アル、そうは言ってもコイツら歯止めが効くか俺は凄い心配だ。

「じゃあ、俺が見切りを付けるがいいか？」

「おう！」

「さっさとやるっぜー！」

「（コクリ）」

ドランも頷いたところで、ジャック・ナギのペアとドランの模擬戦が決まった。

side out

side other

模擬戦の決行が決まった後、ロト達一行は周囲に被害を出すと不味いので、草も木も生えていない広い荒野へ移動して来た。

「じゃ、俺がこのコインを投げて、地面に落ちたら開始だ。」

ラカン、ナギとドランが対峙する真ん中でロトはコインを見せてルールを確認する。

ルールはコインが地面に落ちてから始め、模擬戦の終了はナギ、ラカン、ドランの3人（？）のうち誰か1人が気絶、もしくはロトが続行は不可能と判断したら終わりとなる。

因みに、アルとゼクトは既に観戦に回っている。

「そんじゃま、いくぜ。」

ロトは親指の上にコインを載せ、思いっきり空に打ち上げて、急いでその場を離れる。

そして、コインが落ちたその瞬間

「雷の暴風！！」

ナギは無詠唱で雷の暴風を繰り出した。しかし、ドランは文字どおり一呼吸先に、放射型に火炎を吐き出す。

雷の暴風は迫り来る火炎と衝突し、切り裂いて突き進むが火炎は勢いをそのままに、雷の暴風を避ける様な形でナギとラカンに襲い掛かる。

「げっ！？障へk…って熱っ！！」

ナギは予想外の結果に慌て魔法障壁を張って防ぐが、熱までは遮断出来ずに大わらわになる。

「ハッ！俺には効くかよ！ラカン適当に右パンチ！」

ラカンは虚空瞬動で飛び上がると、同じく火炎を突き進んで来た雷の暴風を飛んで回避したドランに殴りかかる。

ドランはその場で勢い良く旋回し、遠心力を利用した一撃で迎撃する。

ドゴンッ！！！！

「うほっ、強いなお前！」

肉体と肉体（甲殻）がぶつかった音とは思えない音が響き、ラカンは吹っ飛ばされるが着地すると、体勢を立て直してアーティファクト“千の顔を持つ英雄”を呼び出す。

ドランは少しぐらついたが、直ぐに持ち直した。

「だが、俺のほうが強い!!」

「テメエ！俺を忘れるな！

魔法の射手 連弾 雷の300の矢！」

ラカンは何十本もの剣の投げ、ナギもそれに合わせる形で魔法の射手を放つ。

しかし、ドランはそれを物ともせず、体当たりを敢行する為にナギ達に向かって突撃する。

魔法の射手と剣はその厚い甲殻に阻まれてダメージにならない。

「げえ！？マジかよ！」

「ナギ！上に跳べ！」

端からダメージとして通ると考えて無かったラカンは、動揺してなるナギに指示を飛ばすと自分は滑空してくるドランに向かって駆け出す。

そしてギリギリの所でスライディングをして、飛んでくるドランの下に潜り込み、渾身の一発で上へ突き上げる。

「ラカンWパンチ!!」

「ゴオツ!?!」

上に打ち上げられたドランは流石にくぐもった声で呻く。
羽ばたいて体勢を立て直そうとするが、上には飛び上がっていた
ナギが待機していた。

「くたばれ!! 白き雷!!」

更に白き雷の一撃を受け、ドランは砂塵を巻き上げながら20メートル程吹っ飛ぶ。

「ロト、ドランは死んでもうたんじゃ?」

「……………これは私は謝罪しなければなりませんね。」

「……………コレぐらいじゃ死なないと思うが……………多分。」

一方、観戦していた3人はかなりドランの身を心配していた。

普通の龍種だったら、確実に天に召されているダメージである。模擬戦を勧めたアルは冷や汗が止まらない。

そんな話をしていると、ドラゴンがノソリと砂塵の中から起き上がった。

「ホントにタフですね……………」

「む……………」

アルはドラゴンが生きていた事にホツとするが、傷の程度はさほど無いことにやはり冷や汗が止まらない。ゼクトも同様の様だ。

「まあ、散々賞金首捕まえるときに攻撃されたりするから、自然と甲殻も堅くなってくるし……………ん？」

ロトは苦笑しながら二人に話すが、ドラゴンの様子を見て疑問の声をを出す。

そのドラゴンは、甲殻と甲殻の継ぎ目が段々と赤く発光し、口元からは炎が漏れ、青かった眼は紅く、紅く染まっていた。

「あ……………耳塞いでおいたいいぜ。」

「「は？」」

ロトがおもむろに自分の耳を塞いで忠告し、二人が疑問の声を上げたその瞬間、

「
ッッ！！！！！」

「ぬお！？」

「くう！」

ドランは翼を大きく開き、声にならない音量の大咆哮を空に轟かせた。

大咆哮は音の衝撃破と化し、ラカンとナギを吹き飛ばす。

遠くにいるロト達も思わず耳を塞いで踞ってしまっ程の音量である。

「ろ、ロトよ。あの姿はなんじゃ？」

「あーアレはだな……………戦闘中に興奮したりするとなるんだ。凶暴になって戦闘力が跳ね上がるぞ。」

「す、凄まじいですね……………」

今のドランの様子はアルの一言に尽きた。

「ハツハア！いいじゃねえか！」

「へっ！面白れえ！ぶっ倒して丸焼きにしてるよ！」

ナギとラカンが激昂したドランを見て、久々の手応えのある敵に喜びを感じていた。

もはや、程々にしろと言うロトの言葉は頭からスッポリと抜け落ちていく。

「……………」

ドランは鬨の咆哮を上げながら、再び突っ込んでいく。
ナギはもう一度、虚空瞬動で空へ回避するが、ラカンはドランを正面から受けとめる。

ガガガガガガガガ！！！！

「うおおおおりゃああ！！！！」

ラカンは飛んでくるドランの頭をがしっと掴むが、その勢いは止まらない。20メートル程引き摺られた所で、堪らず後ろに巴投げ

の要領で投げ飛ばす。

「雷の斧!!」

投げ飛ばされたドランをナギが追撃するが、ドランは直ぐ様体勢を立て直して火球のブレスを放つ。放たれた火球は雷の斧と衝突し、大爆発を起こす。

「うおっ!?!」

「退け、ナギっ! ラカン・インパクトオ!!」

ナギは爆発の煽りを受けて吹き飛ばされる。ラカンは間髪入れずに虚空瞬動で駆け上がったドラんに殴りかかる。

ドランは焦ることなくその場で前転をし、大質量の尻尾をラカんに叩きつける。

「あべしっ!」

勢いよく地面に叩きつけられて苦悶の声(?)を上げるラカン。

「魔法の射手 連弾 雷の666の矢!!」

ちょうど真後ろの方向からナギの声が聞こえ、ブレスを撃とうとドランは振り向く。

しかし、ナギの姿は其処には無かった。

「……………」

「百重千重と 重なりて 奔れよ 稲妻 ……」

「ッ!?!」

新たに声のした方向 上を見上げると、既に遅くナギは詠唱を完成させていた。

「千の雷!?!」

「ッ!?!?!」

咄嗟に咆哮と共にブレスを打ち出すが、火球は呆気なく千の雷に打ち消され、雷はドランを直撃する。

「くらいやがれ!?!ラカン・インパセ」

「!?!ぐげえっ」

ドランがフラフラと墜落仕掛かっているところに、持ち前のタフネスさで復活したラカンが畳み掛けようとする。しかし、殴られる直前にドランが持ち直して、その顎あぎにラカンを銜え込む。

「……………ラカン、死にませんよね？」

「大丈夫だろ。なんせアイツは……………」

「バグじゃからの。」

「……………バグだからな。」

「それもそうですね。」

そんな会話が外野で在ったとか無かったとか。

「クソツ！放せ！！」

ラカンは脱出しようと藻掻くが、ドランの顎あぎはラカンを万力の様に絞め上げて放さない。

脱出が無理だと判断したラカンは、自分を銜あえている顎あに拳をピタリと当てると、

「羅漢破裏剣掌！！」

中国拳法でいう、寸頸すんけいを打ち出した。その一撃は偶然にもドランの脳震盪を起こし、ドランはキリモミ回転しながら墜落する。

「っしゃあ！止めだ！止めは刺すな《ラリホー》」……ぐう。」

もう一押し入れようとするナギだが、ドランがこれ以上の戦闘は無理だと判断した口トが模擬戦を（強制的に）終了させる。

こうして、ナギ・ラカンペアVSドランはナギ・ラカンペアの勝利で幕を閉じた。

因みに、模擬戦終了後の外野のコメントは、

「「バグのツレはトコトン、バグ（じゃの）（ですね）。「」

だったそうだ。

閑話（後書き）

感想や意見等、気軽にお寄せ下さい！

そして、ヒロイン投票ですが、締め切りの30日まで残り1週間
となったので、コレ以降は途中経過を伏せさせて頂きますm
m
（――）

投票自体は普通に募集しているので、投票宜しくお願いします
、、（、）

第十一話（前書き）

最終決戦前編

話の都合上、2つに分けました

第十一話

side other

「不気味なぐらい静かだな。」

「舐めてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」

「。。」

ナギとラカンが下を見下ろしながら話している。ナギの隣にはドランとロトが居るが、ロトは何も言わずただじっと前を見つめていた。

今ナギ達は、世界最古の都王都オスティア空中王宮最奥部“墓守り人の宮殿”と呼ばれる場所にいる。

ロトが紅き翼に協力してからロトとアレフガルドの古参の面々は、情報収集と敵拠点の破壊等を繰り返し、信用の出来る人々を集めて遂に完全なる世界の本拠地を突き止めた。

その間に、世界全てが敵であった状況も少しずつ変わり、彼らに協力する者も徐々に増えた。

その結果、この場には、連合や帝国、そしてアリアドネーの混成部隊等、多数の陣営が参戦している。

「ナギ殿！混成部隊配置完了しました！」

ナギに駆け寄る彼女もその一人だ。彼女はセラスという名前で、混成部隊の指揮を執っている。

「おう。あんたらが外の召喚魔や、自動人形を押さえてくれればその間に俺達が突入できる。頼んだぜ。」

「はい。……………そつ、それで……………ナギ殿。あの……………サ、サインを頂けないでしょうか？」

「ああ。そのくらい構わないぜ。」

ナギはそう言ってサラサラとサインを書いていく。

ナギには普段、サインを書く機会なんてのは無いのにかなり手慣れている手付きだった。

「あ、ありがとうございますっ！！　　そ、それですね、口

ト殿にもサインを……………。」

「……………んあ？」

ナギからサインを手渡されたセラスは、ペコリと勢い良く頭を下げた後、顔を赤らめ、モジモジとしながらロトにもサインをねだる。しかし、眼前をじっと睨んでいたロトは話を聞いて居らずに疑問の声を出す。

「サインが欲しいんだってよ。」

「ああ。」

その様子を見てナギが苦笑しながら助け船を出す。

ロトはナギから教えて貰って、セラスから色紙を受け取ると、こちらもサラサラと書いていく。ナギは練習したのか定かではないが、ロトはギルドでちよくちよく書類にサインを書く必要があるのでお手のものだ。

余談だが、紅き翼で一番会員が多いのはリーダーであるナギだが、ロトのファンクラブ会員は更に上をいく。

賞金稼ぎとして活動しているながらも、騎士の様な雰囲気やたまに見せる凜とした表情が人気らしい。

何故か写真も出回っており、某ギルドではお小遣い稼ぎにギルドマスターへの盗撮が流行っているとか。

「あ、ありがとうございますっ！一生大事にします！」

「「お、おっ……。」」

2つのサインを胸に抱えたセラスが感極まった様にロトとナギに頭を下げるが、二人はその勢いにたじたじだった。

「じゃ、俺達は突入するがロトも一緒に来るのか？」

「うんにゃ。俺は外の連中の掃討だな。」

「そうか……。」

ナギの悲しそうな、そして不安そうな表情を見て、ロトは思わず苦笑してしまう。

「大丈夫だ、お前らは勝つさ。“最強の魔法使い” だろ？」

「！？……そうだよな！よっしゃあっ！さっさと完全なる世界なんどぶっ倒して帰ってくるぜー！」

気合いを入れ直したナギは振り返ると、後ろで静かに待っていた紅き翼の面々を見回して、号令をかけた。

「紅き翼　　出撃だ！！」

「「「「「「「「「「「「「「「」

s i d e o u t

s i d e セラス

ロト・ドラゴニクス

“ 隻眼の龍騎士 ” や “ 呪文使い ” 等の 2 つ名を持ち、賞金稼ぎギルド “ アレフガルド ” の初代ギルドマスターで既に伝説の賞金稼ぎ等と呼ばれている人。

その方が、今、目の前に居る。

青を基調とした軽そうな服を来こみ、赤いマントを肩から羽織っている。

自身のアーティファクトを地面に突き刺して柄に両手を置き、隣にはロト殿のパートナーである黒龍が静かに頭を垂れて、待機して

いる。

佇んで居るだけなのだが、その佇まいには威厳があった。

「うし。んじゃ、やるか。」

ナギ殿達を見送った後、ロト殿は何処かへ散歩へ行くような口調でそう言った。

「セラス。俺が始まりの合図をするから頼む。」

「はっ！！」

そう言い放つと、ロト殿は自身の周りに2つの球体を発生させた。一つの球体は燃える様な赤い色をし、もう一方は凍り付く様な青い色を宿していた。

そして、ロト殿はその2つの球体を一つに纏めると、

「反撃の狼煙だ！《メドロア》！！」

そう言い放つと呪文と共に、球体から光線が発射された。そして、その弾道が通った後には“何も残って居なかった”。

その時は何が起こったのか判らなかったが後でこの呪文の原理を聞いた所、“熱のプラスと熱のマイナスの魔法力をスパークさせて「熱の無」、消滅の力を生成し、光の矢のように束ね、射放つ呪文

”なんだそうだ。

私には一生実現不可能だろう。

「グオオオオオオオ！！」

「はっ！総員、掛かれ！！！」

ドラム殿の咆哮で我に返った私は、命令を出しながらもロト殿の実力に戦慄した。

とりあえず、考える事は目の前の敵を倒す事だった。私が指揮する人々の中にはロト殿のギルドのメンバーもいる。

戦争を終わらせるために、ロト殿から託された人々《思い》の為に

side out

side ロト

「粗方片付いたか……………」

俺は周りを見渡しながら呟いた。周囲にはまだ、大量の敵が居るがそれでも最初と比べれば明らかに数が少ない。

「セラス！俺はナギの方へ行く！！後は任せたぞ！！」

「はっ！お気を付けて！！」

傍で戦っていたセラスに一声かけ、口笛でドランを呼び寄せて神殿へと急ぐ。

「ナギ！」

中に入ると、ナギはフェイトと対峙していた。

対峙していると言っても、勝負は既に決まっていてフェイトをナギが柱ずりにしているところだ。

「あんの馬鹿っ！！」

しかし、長年賞金稼ぎとして遣ってきた俺の勘が“ヤバい”と
まだ終わっていない、と警鐘を鳴らしている。

しかし、ナギは敵を倒したと思っているのか警戒を解いてしまっ
ている。

「クソツ！《スカラ》！」

声はナギに届かない。

しょうがないので、防御魔法だけ発動して全力走る。
ピオラを使わなくても全力で掛ければ間に合う筈だ。

「どけっ！！」

「んなっ！ロト！？」

ナギをフェイトから引き剥がして、後ろにナギを放る。ナギは俺
の気配に気付かなかつたみたいで、驚いている様だった。

ナギを放った刹那、巨大な閃光が迫ってくる。

俺は両腕を開き、大の字の形で閃光とナギ達の間立つ。

「仁王立ち！！！」

ゴウッ……!!

「ロトオオオオオ!!」

閃光に飲み込まれ、薄れゆく意識の中で俺は、ナギの絶叫を聞いた気がした。

第十一話（後書き）

感想や要望等、よろしく願います m () m

同時にヒロイン投票の方も気軽に！投票下さい

第十二話（前書き）

最終決戦その二

第十二話

side other

「ロトオオオオオ！！！！」

ナギの絶叫も虚しく、ナギ達の盾になったロトが光に飲み込まれる。

しかし、閃光は止まることなく、勢いを弱めながらも紅き翼の面々に襲いかかった。

詠春は体を何ヶ所か貫かれ、ラカンも両腕を犠牲にしたお陰で致命傷は免れたが、腕が完全に使えない状態になった。

そして、奥から黒いローブの男
造物主、始まりの魔法使
いと呼ばれた男が現れた。

「テメエエエエエ！！よくもロトを！」

「落ち着いてください、ナギ！」

「ナギ！落ち着け！！ありゃヤベえ！」

ナギは自身が傷ついているのにも拘らず、激昂して一人で造物主に挑もうとする。アルとラカンが必死にそれを押し留める。

「どけっ！！俺がアイツをぶっ飛ばすんだよ！」

「馬鹿者！！ロトの犠牲を無駄にするのか！？」

おいおい……………勝手に殺すなよ……………。

「……………ロトッ！？」「……………」

アル達の制止を聞かず突っ込もうとするナギに、ゼクトがロトの事を持ち出して一括するが、何処からかそのロト本人が不満そうに文句を言う。

「ロト何処だ！？」

「此処だよ……………」

声のした方向を見ると四肢が消滅し、達磨の様になった口トが横たわっていた。

「口ト！」

「大丈夫か？」

「まあ、大丈夫っちゃあ大丈夫だ。暫く動けないがな。」

口トにナギや詠春が慌てて駆け寄り、アルとゼクトは既に四肢の再構築を始めている賢者の石の回復速度に舌を巻きながら、回復魔法を重ね掛ける。

「アル、ゼクト。」

そして、ナギは何か決心をした顔で二人に声をかける。

「俺を回復させてくれ。」

「「「「「なっ!?!」「「「「「」

「……………」。

その一声に紅き翼の他のメンバーは驚愕し、ロトは真意を読み取るかの様にナギをじっと見つめる。

「おいナギっ！ 待て、アイツはやべえんだよ！」

ナギの実質的に一人で造物主に挑むと言ってる発言に、ラカンが慌てて声をかける。

「おいおい、どうしたんだジャック？ 怖気付くなんてお前らしくないぜ」

ナギはボロボロにながらも、それを表情に出さずに不敵に笑って軽口を叩く。

「俺には解るんだよ！ アイツは俺らに敵う相手じゃねえんだ！」

「……………かもな。俺にだって、アイツがヤバいことぐらい解る。」

戦闘狂と言っても過言ではないラカンが死の恐怖を感じる程の強さ。

そして、魔法世界出身だからこそ解る造物主の凄まじさ。そのヤバさは、旧世界出身のナギでも容易に感じられる。

だが、

「俺がコイツを倒さないで誰が倒す!!」

「「「「「!!」」」」」

そう。ここで諦めても何も始まらない。何も終わらない。

「やれやれ。馬鹿なリーダーに付き合わされる身にもなってくれ。」

「ですね。」

「そっげゃの。」

「詠春……アルとお師匠も。」

貫かれた部分を止血して立ち上がり、心底呆れたような口調で話す詠春。しかし、その顔は不敵に笑っていた。

アルとゼクトもそれに同調しながらナギと自身に回復魔法を掛ける。

「ハッ！まさか、ちんちくりんのナギのに励まされるとは思ってなかったぜ！」

「ジャック……………テメエ……………」

ラカンが両腕の調子確かめるように腕を回しながらナギに声をかけるが、ちょっとした外れな発言にナギが青筋を浮かべる。

「ロト……………お前の分もぶっ飛ばしてくるからな。」

「フツ……………。15分だ。」

「あん？」

そして、まだ完全に再構築されていないロトにナギが話しかけるが、ロトはニヤリと口元を釣り上げて15分と時間を提示する。

「15分だ。」

15分経ったら、俺がケリを付けてやるよ。」

「けっ！！それ迄に倒してるから要らねえよ。」

「そいつはいいな。俺も面倒な戦いをしなくて済むしな。それとコイツは饞別だ 《ベホマ》」

ロトは呪文を発動し、ナギを回復させる。

回復呪文の適性は無いが、その呪文はしっかりとナギの傷を癒した。

「よしっ！じゃあ、サクッと倒して帰るぜ！！」

「「「「「「「「」」」」」」」」」

ナギは他の面々に喝を入れ、紅き翼は造物主に挑み掛かった。

「ちいつ!!」

造物主との戦いが始まって、遂に立っているのは造物主とナギだけになった。

造物主の圧倒的な攻撃の前に詠春、アル、ゼクト、ラカンは次々と傷付き、膝を着いた。

「っ!?!ヤバイ!!!」

ナギも満身創痍だったが、造物主の攻撃を必死に避けて魔法を打ち込み、懸命に戦った。

しかし、一瞬気がゆるんだ隙を突き、造物主の閃光がナギに迫る。障壁も間に合わず、死を覚悟したその時

「
《ギガデイン》!!!」

「!!!」

閃光と雷光が交錯し、激しく爆ぜた。もうもつと煙る爆炎から現われたのは、

「さて、約束の15分！終幕の時間だ！」

“隻眼の龍騎士” ロト・ドラゴニクス

マントを棚引かせ、獰猛な笑みを浮かべている。

「ロト！」

「おうよ！幕引きは派手にいくぜ！！！」

ロトはそう言って、自分の周囲に6つの球体を浮かべた。

その球体はそれぞれ、雷・闇・風・炎・氷・焦熱の球体だった。

ロトは六つの球体を角とした正六角形を作り出すと、球体同士は自然に線で繋がりだして一つの魔方陣描く。

「究極呪文！！！」
マダンテ

キイイイイイン！！

始動キーをロトが言い放つと、魔方陣が甲高い音共に輝き出す。造物主の周囲にも同じ魔方陣が展開され、魔力が収束する。

そして、

ゴオオオオオオオ！！！！

「ぐうううっ！！！！」

収束した魔力が爆発し、魔力の奔流が造物主を襲う。

マダンテは本来、術者の内包する魔力をそのまま解き放ち魔力爆発を起こす。効果範囲は対軍どころか、使用魔力量によっては対国と言っても過言ではない規模だ。

ロトはその効果範囲を造物主の周囲のみになるように制御してる。そして魔力の嵐が鎮まると、其処にはボロボロのローブを被った男　造物主が佇んでいた。

「ま、マジか……………」

マダンテはその圧倒的な威力の変わりに、莫大な量の魔力を必要とするまさに“究極呪文”だ。

即ち、マダンテを使用した術者は瞬間的な大量の魔力の消費で、最悪死に至る。

ロトは凄まじい虚脱感を感じて、意識が飛びそうになりながらも造物主を睨む。

「ナ……………ギ……………」

ロトが気を失う直前に目にしたのは、ナギが造物主に挑み掛かる光景だった。

その後、ロトは完全に意識を手放した。

side
ロト

「う、うん……………」。

「……は……………？」

「起きたか？」

「大丈夫ですか？」

詠春とアルか……………ここは……………？

俺は何で気を失ったんだ？確か……マダンテを造物主に………
って！

「アル！詠春！！造物主は！？ナギは！？」

「落ち着いてください口ト。今あなたが気を失った後の事を教えますから。」

「お、おう。」

アルに諫められ、俺が気を失った後の事の顛末を聞くことにする。

結果的に言うと、造物主はナギが倒したらしい。しかし、ゼクトが造物主に乗っ取られ行方不明。 始まりの魔法は半分発動してしまった、と。

「ゼクトが………。」

造物主に乗っ取られたのは衝撃的だった。

ナギの師匠らしく、口調が妙に古くさい小さな子供。

「おう。起きたか口ト。」

「大丈夫なのか？」

ゼクトの事に思いを馳せていると、ジャックとナギが入ってきた。

ジャックの両腕には包帯が巻かれていて、ナギは5歳ぐらいの女の子の手を引いている。

ん？

「なあ、詠春……………」

「なんだ？」

ナギとジャックが落ち着いたところで話を聞くと、女の子は黄昏の巫女で完全なる世界の計画の為に利用されていたらしい。

「“黄昏の巫女”って言うとオスティアの防御機能の名前じゃないのか？」

「そうだけ。だけど、それはこの姫子ちゃんの魔法無力化のスキルを利用しただけだ。」

ナギが吐き捨てるように言う。詳しく話を聞いてみると、嬢ちゃんは魔法で百年以上防御機能として道具扱いされて精神が摩耗しているらしい。

確かに胸くそ悪くなる話だ。

「よお、嬢ちゃん。」

「……………ダレ？」

とりあえず、嬢ちゃんと同じくらいの屈んで話しかける。
すると、嬢ちゃんは首をちよつと傾げる。

「俺はロト・ドラゴニクスってんだ。嬢ちゃんの名前は？」

「……………ロト……………ナマエ……………アスナ……………」

アスナか……………。

「いい名前だな。」

「……………」

ワシワシと撫でるともぞもぞと身を擦らせる。なんかかわいいな。

「お、起きたか。身体は大丈夫か？」

「おうよ。魔力不足で気絶しただけだからバッチリ。」

アスナを撫でていると、ガトウとタカミチ、クルトの3人が入ってくる。

「式典は4時間後だからな。」

「ん？式典ってなんだ？」

「戦争を止めるのに貢献したって事で勲章が貰えるらしいぜ！」

「ま、当然の事だな！」

「マジか……………」

げ。

また変に有名になったら絶対アレフガルドの仕事増えるだろ…………

…………

「そついえばアリカは？」

「……………アリカ王女は戦後処理で忙しい。」

……………ふむ。

「ま、いいや。俺はちょっと外へ行くぜ。」

「何処に行くのですか？」

「ちょっと野暮用だ。式典までには戻ってくる。」

俺はそれだけ言ってルーラで移動をする。

目的地は アレフガルドだ。

ルーラでひとつ飛びし、俺は今アレフガルドの前にいる。
半年とちょっと来てないだけだが随分と感慨深いな。

「さて、と。」

眼帯を取って“最強の眼”の証であり、アレフガルドのギルドマ
ークでもあるウロボロスが刻み込まれている右目を外気に晒すし、
ギルドの中へ入る。

「お帰りなさいロトさん
すかね？」

いや、マスターと呼ぶべきで

入ってきた俺を見ると、アランは悪戯っぽく笑いながら冗談を言
う。

ギルドの中にはアレフガルドのギルドメンバー全員が集結してい
た。

「さて、諸君。

ギルドマスターからの特別クエストだ。」

俺は口角を釣り上げながら言い放った。

s i d e o u t

第十二話（後書き）

感想や意見等気軽によろしくお願いしますm（　　）m

マダンテの下りはゲーム内のマダンテのアクションとマンガ「ロトの紋章」を参考にしました

魔方阵のイメージは鋼の錬金術師の賢者の石の錬成陣です

ヒロイン投票も継続してやっています。此方も気軽に投票下さい。

第十三話（前書き）

オスティア崩落編とその後日談みたいな感じになってしまった……

ヒロイン投票の結果は後書きで

第十三話

side other

ロトはアレフガルドで打ち合わせをしてナギ達の所に戻り、式典に参加した。

式典は戦争が終結した事もあり、凄まじい賑わいだった。

式典を終え仕込みの事を話すためアリカを探すと、アリカはちょうどガトウやクルト達と話をしている所だった。

「ようアリカ。」

「……………なんじゃ下郎。妾は一国の女王だ。薄汚い賞金稼ぎ如きが話しかけ」「オスティアの崩落か？」っ！？何処でそれを！！！」

ロトは右手を上げて何気ない雰囲気でアリカ達に話しかけるが、アリカは以前とは一変して無表情でロトを拒絶しようとする。しかし、ロトの一言に驚愕した表情を見せた。

「おいおい。“薄汚い賞金稼ぎ”を舐めんなよ？こっちは賞金首の潜伏場所を推理したりするんだ。それこそ野良犬の様にしつこいんだぜ？」

ロトはさりげなく皮肉を織り交ぜながら不敵に笑って話す。

「まず、式典をわざわざ離宮島で遣ることに疑問を思った。普通にオスティアで、やりゃあいいのにな。其処から、オスティアで何か不具合があると解る。」

次に、俺が目覚めてからお前さんが一度も様子を見に来なくて、ガトウは“戦後処理で忙しい”と言ってる。
時間なら戦争が終わったんだから沢山あるのにな？」

まあ、戦後処理つちゃあ戦後処理だがな、と呟きながらロトは続きを話す。

「んで、最後に造物主達の儀式での魔力衰退化現象。コレが原因で魔力で浮いているオスティアの崩落って事に気付いた。違うか？」

「……………正解だ。お前、監察官になったらどうだ？」

「一ギルドのギルドマスターに転職を勧めるな馬鹿野郎。」

完全な推理を披露するロトに、アリカやクルト達が呆然とする中、

いち早く復活したガトウが呆れながら小さく呟く。
その呟きを聞きつけたロトは、律儀にその冗談を一蹴する。

「そこまで把握しているならしかたがあるまい。ロトよ、お主のギルドも力を妾に貸してくれぬか？」

「!? 陛下っ!! 頭をお上げくだ。無理だな。」っ!! ロト! お前
どういう状況かわかっているのか!？」

アリカがロトに頭下げて頼み込むと、ガトウとクルトが慌てて止めさせようとす。

しかし、止めるよりも前にロトが軽い調子でにべもなく断る。

「まあ、待て。お前にも、一つ推理をしてもらおう。」

ガトウが激昂して、ロトに怒鳴るがロトはガトウを抑えて提案をする。

ロトの有無を言わせぬその雰囲気、ガトウも渋々と引き下がる。

「さて、では推理して貰おうか。一つ、さっきまで式典があったが、アレフガルドのメンバーは式典に参加していない。

二つ、俺は式典が始まるの前に何処かへ行った。」

「……………！？まさかっ！！！」

ガトウが正解にたどり着いた様子で驚きの声を上げるが、アリカやタカミチ、クルトは解っていない様子である。

ロトはそれを見て、ニヤニヤとしながら最後のヒントを出す。

「そして、最後　　式典の参加者は徐々に増えていった。」

「「「あっ！！」「」

「そう！」

既に、アレフガルドは独自にオスティアの住民の救出作業を始めている。」

ロトもニイイと、悪戯が成功した子供のような笑みをしながら答えを言い放った。

side out

side out

「……でもロトさん。アレフガルドのギルドメンバーって百人程ですよ。ねぇ？どつやって素早く住民を避難させるんですか？」

ふむ、タカミチ。いい質問だな。

「俺のギルドではな、メンバーは賞金首を捕まえに行く時に特別な魔法具が支給されるんだ。」

そうやって俺が取り出したのは、

「「「「羽？」「」「」」

……よく4人全員ハモツたな。

「そう、羽だ。コレは“キメラの翼”と言ってな、行き先を念じな

がら空に放り投げると、目的地に一瞬で行けるんだ。」

「す、凄い魔法具ですね。」

「まあ、一気に運べる人数は10人までだし、ウチのギルド限定でしか支給も販売もされてないがな。」

一瞬で場所を移動出来るから便利だが、犯罪者の手に渡るとホイホイ逃げられてしまうからな。

「バグか……………」

ガトウ、聞こえているぞ。

「ロト、住民の救出作業の協力、感謝する。」

「なあに、いいって」「じゃが、」「……………あん？」

「何故、此処まで妾を助けてくれるのじゃ？」

……………コイツは何言ってるんだ？

「なんでって、“最後まで協力する”って言った筈だぞ？」

約束した事は最後までやるのがアレフガルドのモットーだからな。

「それに、アンタの事も結構気に入っているからな。」

「「「なっ!?!?」「」」

国の為に尽くすアリの“目”はナギと同じ様な真っ直ぐで、澄んだいい“目”をしている。

……ん?ガトウやタカミチ、クルトは何で固まってるんだ?

「フツ………そうか。」

「ああ。んじゃま、俺は奴らの指揮を執るから行くぜ。」

「ロト!重ね重ね感謝するぞ。」

俺は去りぎわにアリカ言葉に声を掛けられたが、背を向けながら手をひらひらと振ってその場を後にした。

オスティア崩落は俺達、アレフガルドの働きで死者は出なかった。

しかし、アリカは完全なる世界に繋がっていたとされ元老院に捕えられてしまった。

カリカリカリカリ……………「トーン

「ふう……………。」

俺はアレフガルドにある一室で書類整理をしている。
かなり長い時間遣っていたので、一度ペンを置いて体をほぐす。

「この量の書類は流石に疲れるな……………」

「随分多いの。」

コキコキと首を鳴らしながら

目の前に積み重ねられた書類をぼんやりと眺めていると、膝の上のモノが呆れた様な声を出した。

「あんな事になったんだから当たり前だろ？オスティアから避難させた人達がアレフガルドで働きたいって言うから。」

そう、あの崩落の一件でオスティアの住民は一時的にアレフガルドで保護し、その後難民としてメガロとヘラスで受け入れる手筈だったのだが、過半数以上の人間がアレフガルドでの残留を希望した。うちのギルドに助けられた恩返しをしたいとの事だ。

アレフガルドとしては嬉しい事だし、余り無下に出来ずに古参の連中そうで入団試験をやり、住むための住居の建設、商人だった連中には商売の為の場所の提供等の手助けをした。

更にオスティア崩壊の際の立役者であり、“英雄が所属しているギルド”として有名になったアレフガルドは一気に入団希望者が増えた。

普段はギルドマスターである俺や代理のアランが直々に審査をするのだが、余りにも人数が多すぎるので設立当時から所属している連中にも手伝って貰い、模擬戦での試験の前に面接を行っている。

そこで興味本位で来た奴や冷やかしをふるい落としてから、本試験を行う様になっている。

面接や本試験で弾かれたのは多数居たが、それでも合格した者も少なく無い。

その結果、人が増えすぎたアレフガルドは、ギルドがある建物を中心とした一つの街みだいになった。

“賞金稼ぎの統治する街”って何処のノイエ・ヒースガルドだよ……。

勿論、アレフガルドが実質的に街を仕切っているような状況なので盗人や強盗も出なくて治安はすこぶるいい。

おかげで、普段はギルドマネージャーが補助してくれているので書類は殆ど無かったが、流石に街を一つ統治しているような状況なので、俺がやらなければならぬような重要な書類が一気に増えた。今、それを一生懸命に処理している所だ。

ま、それはいいとして

「なんでデメエはそこにいる？」

「城から抜け出してきたのじゃ！」

ゴスッ

ドヤ顔でそう言い放つ膝の上のモノとす。

テオドラに拳骨を落

「~~~~~ッ痛いじゃー!!」

「城に帰れ!!」

「嫌じゃー!!」

「ハウス!!」

「い〜や〜じゃ〜!!」

膝の上でじたばたするな!

「あ〜鬱陶しい!じゃあ居てもいいから大人しくしてろ!!」

「わかつたのじゃー!!」

テオは嬉しそうにニパーと笑う。

こここの何処がいいんだかなあ……。しかも、テオドラのこのギルドへの脱走は表だって公言しないが、黙認されているっぽいし。本当に狸だなコイツの父親(皇帝)は。

「そういえば、式典以降に紅き翼の奴らに会ったか？」

「いんや、会ってない。」

あの式典で公式に終戦が宣言されたが、未だ各地で小競り合いが起きている。

ナギ達、紅き翼は鎮圧の為にあちこちを回っているらしい。賞金首は戦後のどさくさに紛れて戦地に潜んでいるケースが多い。その為、ウチのギルドの連中も偶然アイツらに巡り合う事がよくあるから紅き翼の動向に事欠かない。

……………俺に報告する時に抱えている色紙がひっじょーに気になるが敢えてスルーだ。

「ナギは様子はどうじゃ？」

「……………普段通りに振る舞っているらしいが、目に迷いが浮かんでいるらしい。」

ソースはウチのギルドメンバー。観察眼が肥えてきて何よりだ。

「さっさと助けに行けばいいものを……………」

「色々悩む事があるだろうさ。」

ナギにとっては初めての挫折に近い状態だからな。

助けに行きたいが、濡れ衣とはいえ大罪人に仕立て上げられたアリカ。それをナギが助けたとすれば大問題。再び魔法世界を敵に回す事になるだろう。

「ま、なるようになるさ。」

テオを膝から降ろして、伸びをしてからバルコニーへ向かう。

「何処に行くのじゃ？」

「野暮用だ。仕事サボって抜け出してきたんだろ？帰ってやれよ。」

「うつ………………。そ、そんな事無いのじゃ！」

「ハイハイ。《ルーラ》」

焦って吃るテオに苦笑しながら俺はルーラで移動する。

少し発破を掛けてやるか。

ナギ達が滞在しているという一室に向かうとアルが向かえてくれた。

なんでもラカンと詠春は鎮圧に行き、ガトウ達は仕事で居ないらしい。

ガトウと言えばアスナはアイツが引き取ったらしい。
よく子供引き取るよな………………。カミさん居なくせに。

この前問いただしたら、背中に哀愁を漂わせながら空を見上げながらタバコを吹かして誤魔化してた。

「ナギは？」

「奥の部屋に居ますが、鍵が掛かって入れませんよ。」

大丈夫だ、問題ない。

鍵くらい強引に開けてしまえば、どうと言う事はない。

「賞金稼ぎのスキル舐めるなよ。《アバカム》」

呪文で鍵を開ける。

ソレって盗賊のスキルじゃ無いんですか、とかアルが呟いていたが気にしない。

「ナギ。」

「……………口トか。」

ナギは電気も点けないで暗闇の中でぼんやりとしていた。普通の馬鹿さ加減は鳴りを潜めていて、覇気も無い。

「お前なあ……………シャキっとしろよ。仮にもリーダーだろ？」

「うるせえ……………放っておいてくれ。」

随分と精神的にキてるようだな。

じゃあねえ、人生の先輩として、ヒントを出してやるか。

「ナギ、てめえは何の為に戦ったんだ？」

「……………」

「俺が言える事は其れだけだ。」

「俺は……………」

俺は言うだけ言って踵を返し、部屋を出た。ナギが最後に口に出した疑問には答えない。

部屋の外ではアルが待っていた。何だかんだで仲間思いだな。

「もう終わりですか？」

「ああ。最終的に動くのらアイツだ。俺から言える事は余りねえよ。」

「フフフ……………流石に百年も生きてきた人の言葉の重みは違いますね。」

「言ってる。」

もう此処に用は無い。

s
i
d
e

o
u
t

第十三話（後書き）

感想や意見等あったら気軽によろしくお願いしますm(____)m

ヒロイン投票の結果はこちらです

- 一位：真名 20票
- 二位：千雨 14票
- 三位：千鶴 12票
- 明日菜 12票
- 四位：木乃香 11票
- 五位：エヴァ 9票

次点

- アキラ 8票
- 刹那 7票
- 朝倉 6票
- 夕映 4票
- 宮崎 3票
- 茶々丸 3票
- 亜子 2票
- 裕菜 2票
- ドラン 2票
- 楓 1票
- あやか 1票
- 鳴滝姉妹 1票
- 無し 1票

となりました！沢山の投票ありがとうございました！

よって、ヒロインは五位のエヴァまでになります。
なお、これについての苦情は一切受け付けていません。
また、ヒロインに選ばれなくても僅差での落選したキャラについては、他より多少は優勢で主人公と絡ませると思います。

そして、とりあえず大戦期はこの話で完結！

これ以降の話はヒロイン投票の結果に左右されるため、まだ書いていません。

なので、1週間に1回、日曜日の0時に更新に切り替えていきます。
ある程度ストックが貯まったら元のペースに戻るので宜しく願います（、、）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0106x/>

ネギま！ 龍騎士が往く

2011年10月30日00時26分発行